
魔法研究所 中年所員イ・コージの日々 ザコ 勇者 番外編

くま太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法研究所 中年所員イ・コージの日々 ザコ 勇者 番外編

【Nコード】

N5132Y

【作者名】

くま太郎

【あらすじ】

ルーンランド魔法研究所の所員イ・コージは独身・彼女なしの38才。

今日も無茶な依頼に振り回されて羽目に。

この作品は作者が書いているザコ 勇者 ザコにはザコの闘い方のスピンオフ作品です

イ・コージの日々（前書き）

ネタキャラから幕間主人公へ、そしてとうとうイ・コージはオリジナル小説の主人公になりました

イ・コージの日々

魔法王国ルーンランド

剣と魔法の世界オーディヌスで魔法に重きをおく国。

当然、魔法の研究には、かなりの力を入れている。

その中心はルーンランド魔法研究所、幾重物の魔法結界に保護された3階立ての建物は、広大な敷地に建っていた。

そして魔法研究所に1人の男が出社して来る。

ぽっちゃり体型に短い黒髪に黒縁眼鏡、お世辞にも美男子とは言えないの容姿を持つ男の名前はイ・コージ。

38才独身彼女なし、ちなみに研究所には、つい最近スカウトされたばかりである。

前は違う国の魔法研究所で働いていたが、人にはあまり言えない理由で退職をした後にルーンランドの魔法研究所にスカウトをされたのだ。

中途採用とスポンサーのない哀しさかイ・コージにあてがわれている研究室は決して広くはない。

イ・コージは人より早く出社して研究室を掃除した後に研究室で朝食を食べる。

朝食と言っても前の日に買ったパンとお茶だけの侘びしい物。

一人暮らしの侘びしい部屋で侘びしい食事をする位なら実験道具に囲まれて食べた方が、侘びしさも薄れるし時間短縮にも繋がるからである。

あらかた食事を食べ終えたイ・コージに1人の女性が声を掛けてき

た。

「またー研究室で食事ですかー？いいですけども栄養にも気を使つて下さいよー」

彼女の名前はリア・クローゼ、イ・コージの助手である。

年は二十歳と言うがボサボサの髪を紐で結わえ、でかい眼鏡をかけて化粧もしていないから、それが本当かはどうかは見た目では分からない。

「リアさんおはようございます。栄養は昼にとりますから、それで今日は新しい課題は届いていませんか？」

イ・コージの様な新参加者が好きな研究を出来る訳がなく貴族や商人からの依頼をこなしていくしかない。

「来てますよー。今回は騎士団から研がなくていい剣を作つて欲しいそうですー。お坊ちゃま達は武器の手入れより髪や服の手入れが大切なんですよねー」

リアが言っているのは決して悪口ではなく、魔法王国のルーンランドにおいて騎士を目指す貴族は少なく才能ある者は宮廷魔術師やルーンランドが誇る魔術師隊を目指す。

従つて騎士団は自然とお飾り的な物に落ちぶれていた。

口の悪い国民から言わせるとお花畑騎士団、頭の中がお花畑で、見た目の美しさにこだわり手間も懸かる所がお花畑と言われる由縁だ。

「これ以上剣に新しい魔法を付与するのは、きついですね」

少し前に騎士団からの依頼で剣に軽量化や熱撃の魔法等を付与したばかりである。

一時的な魔法と違いイ・コージに求められるのは半恒久的な魔法効果。場合によっては剣に触媒を埋め込んだり魔法文様を刻み込む必要がある。

従って過度の魔法付与は剣の耐久度を著しく下げかねない。

（泊まりですね…）

イ・コージはある事情で貴族嫌いになっていたが、ルーンランドに来てからの無茶振りの連続でさらに貴族嫌いに拍車がかかった気がする。

side リア・クローゼ

（イ・コージさんも、こんな無駄な依頼断ればいいのに）

お花畑騎士団に便利な装備を与えても精々貴族が集うパーティで自慢するしかないのだから。

もつとも全く無駄だと言う訳ではなく、イ・コージの技術を利用した品を魔法研究所では販売しており、その利益は研究所だけでなくルーンランドの国庫も潤していた。

実際にイ・コージがルーンランドに来て最初に手掛けたマジックアイティム”ゴブリンバイバイ”はゴブリンの被害を激減させただけではなく、今や重要な輸出品の1つとなっているのだから。

つまり今回の装備も有用ならルーンランドにおいて、実質的に直接攻撃をになっている傭兵隊に格安でまわされる事になる。

（さてイ・コージさんは今回どんな魔法を使ってくれるんでしょうねー）

恋よりオシヤレより魔法に興味があるリアにしてみれば次々に新しい工夫を見せてもらえるイ・コージの研究室は理想の職場であった。

side イ・コージ

哀しいかな。弱小研究所、イ・コージは1つの仕事だけに関わっている事ができないでいる。

研究室には騎士団や傭兵隊から依頼されている装備品が魔法付与待ち状態にされていた。

「イ・コージさん、新しい依頼は上手くいきそうですか？」

「所長おはようございます。とりあえず構想はありますので、定時の仕事が終わりに次第取りがかかりますよ」

イ・コージに話し掛けてきたのは魔法研究所の所長ヤ・ツレ。

イ・コージは、これほど名を体で表している人間を見た事はない。細すぎる体に薄くなつた髪は、正にやつれた感じがしているし、年は40を少し越えた位な筈であるが、そのやつれ感からか下手をしたら老人にも見えたりする。

「すみません。我が研究所で一番の功績がある魔術師に報いる事が出来なくて」

そう言うことや、ツレは薄くなつた頭をイ・コージに下げてきた。

「止めて下さい。所長が誘ってくれなかったら自分は、この世にす
らないんですから、それに有名になんてなりたくないですし」

（相変わらず油断がないお人だ。下手に急かせないで、こつち
が自主的に徹夜する様に仕向けるんだから）

事実ヤ・ツレは権謀術数に長けており自分の悲哀たっぷりな容姿
さえ平気で武器にしてしまう。

忙しい所長がわざわざ自分の所に、来た所を見ると、今回の依頼は
それなりに急ぐ物らしい。

「とりあえず来月にお城で開かれるダンスパーティーにまで形して
くれたらいいですから」

つまり、騎士団のお坊ちやま達は剣の手入れに掛ける時間をダンス
パーティーの準備に費やしたいらしい。

（恩ある所長の髪の為にも頑張るとしますか）

決意を新たに装備品に魔法を付与していくイ・コージであった。

イ・コージの日々（後書き）

2作同時連載を頑張ります

イ・コージの望み（前書き）

1日でお気に入り登録が40を越えていました
イ・コージ最初はネタキャラだったのに感謝です

イ・コージの望み

side イ・コージ

真夜中の研究室で中年の男が机の上に置かれた物をジッと見つめていた。

これしかないですね。

依頼からは些か離れていますけども、使い勝手とかを考えると、これが一番ですよ…。

（明日リアさんの反応を見てから決めますか）

イ・コージは冷たい床に寝転がってぼつちやりした体を毛布で包むと眠りについた。

side リア

それを見た時にリアは頭を抱えなくなった。

一応は尊敬をしている上司が研究室の床で寝ていたからである。

（この人は私がいなきゃ研究室に住み着ちゃうんじゃないかな？）

自分も同い年の女の子に比べたら自己に対する関心が薄いほうではあるけども、この上司にはもう少し自分自身を労る気持ちを持って欲しいと思う。

そんな事より、今私がしなきゃいけないのは

「イ・コージさん起きて下さいー。風邪ひいちゃいますよー」

「ふえ、あつリアさんおはようございます」

流石のイ・コージさんでも熟睡は出来なかったらしく、どこか眠たそうだ。

「こんな生活をしていたら体を壊しちゃいますよー」

「ははっ、誰かに心配をしてもらえるなんて久しぶりですね」

それ位でそんなに嬉しそうに笑わなくてもいいのに

「そりゃ同じ職場の人が床で寝ていたら心配しますよー」

「デユクセンに居た頃に研究室で寝ていたら心配より先に研究結果を盗む同僚ばかりでしたから、リアさんそれよりこれを見て下さい」

イ・コージさんが差し出したのは、何の変哲もないフェルト布。

「フェルト布ですよ。これがどうかしましたかー？」

「よく見て下さい」

そう言われてフェルト布を良く見ると布と同じ色の糸で刺繍が施してあった。

「これは魔法陣ですか？」

それにイ・コージさんが刺繍したの？

真夜中の研究室で1人で？

「羊毛に圧力の魔法を掛けてフェルト布を作り、魔力を通わせた絹糸にサビ除去と研磨の魔法陣を刺繍してあります。これを鞘の内部に張り付けるに予定です」

剣を抜く度に剣が磨かれる訳ですか。
でも

「騎士団の中には鞘に宝石とかをはめ込んでいるお馬鹿さんもいますよー？それをバラして内側に張り付けるのは難しいですかー？」

「そんな人には従者さんに直接拭いてもらうしかありませんね。でも軽く拭くだけで剣が輝きますから騎士団の人は自分で磨きたがるかと」

私も試しに預かっている剣をフェルト布で軽く拭いてみたら、手入れがあまりされていなかった剣が直ぐに輝きを取り戻したんです。確かにこれなら見栄っ張りの多い騎士団に受けると思いますー。

「汚れたら交換ですかー。洗ったら駄目なんですか？」

「洗うと刺繍が崩れちゃうんですよ。それに貴族の皆様なら買い換えてくれるじゃないですか。軽い魔力があれば誰でも縫えますから雇用にも繋がりますよ」

「随分と気を使いますねー」

イ・コージさんは使い勝手だけでなく製造方法まで考えるなんて。

「私の名前が出なくても責任は取られますからね。出来る事はしておきたいんですよ。」

それで功績と利益は研究所の物なんですよー

「でもこれだと真似されちゃうじゃないですかー？」

「大丈夫ですよ。最後の防刃の魔法は研究所で付与しますから」

手抜きりはなしですか。

結果、フェルト布は騎士団や傭兵隊に大好評になりました。

中には鎧や兜まで磨く人も出て来て、ルーンランドでは汚れ1つない装備をしてる者をフェミニストと呼ぶ様になった程ですから。

side イ・コージ

なぜか所長のヤ・ツレーさんから呼び出しをされました。

何か苦情が来たんでしょうか？

まさかの退職勧告じゃないですよね？

「失礼致します。イ・コージです」

幸い所長室は穏やかな雰囲気です。

でも穏やかな雰囲気からの退職や訓告も良くある話。

「イ・コージさん良く来てくれました。フェルト布の評判とても良

いですよ」

良かった、悪い事ではなさそうです。

「それなら幸いです。それで何の御用でしょうか」

「そんなに緊張しないで下さい。イ・コージさんの評価が高まったから何かプレゼントを贈りたいと思ひましてね。例えば君好みの美しい助手でも構いませんよ」

美しい助手が来た所で何もありませんから、それはいいですね。

「それなら欲しいモノがあるんですが……」

side リア

「研究室の引越しですかー？」

「ここは手狭ですからね。こないだのフェルト布のご褒美として広めの研究室をお願いしたんですよ」

イ・コージさんは嬉しそうに話しているけども、ゴブリンバイバイや今回のフェルト布の売り上げを考えると何とも慎ましい願いなんですけど

「それで良いんですかー？自分好みの女の人を助者として囲っている人もいますよー」

「何を言ってるんですか？そんな事したら目立つでしょ、それに

私にはそんな度量も器量もありませんから」

確かにイ・コージさんの立場を考えると目立つのを避けたいのは分かりますけど、そんな情けない事を堂々と言わないでも

――――

新しい研究室を見ての感想は1つ。

（イ・コージさんは研究所に住み込むつもりですね）

だって個室にベットもあるしキッチンまであるんですから

「1ついいでしょ。ここなら安心してグッスリと眠れます」

そうですね。

ここはルーンランドの心臓部ですから他国の人間が無断で入るのは、ほぼ不可能ですもんね！。

イ・コージさんは見つかる心配がありませんもんね。

イ・コージの望み（後書き）

同僚やら上司とかをだそうかと、そこでサラリーマンの愚痴を募集します

ザコ以上に男性向け小説になる気が

上司を選べないのがサラリーマン（前書き）

なんとこの作品が日別で7位になってました
いいんじゃないか？

上司を選べないのがサラリーマン

魔法研究所は研究開発部・商品作成部・販売部・総務部に分かれています。

私がいるのは研究開発部第2課。

第1課は自由研究をしており、私がいる2課では研究所に届いた依頼に対応しています。

「イ・コージちゃん、こないだのフェルトにクレームが来たからなんとかしてちょうだい」

私に嫌味にたつぷりに話しかけてきたのは2課の開発主任テガ・ラパクーリさん。

いやテガさん、フェルトの開発責任者になりたいって騒いだのは貴男じゃないですか？

「わかりました、届いたクレームを見せて下さい」

……

・フェルト布でこぼしたワインを拭いたら使えなくなたつぞ。新品と取り替えろ

・剣を磨いたら鋭くなりすぎて指を切っちゃったじゃないか

・銀のフォークを磨いたら大事なお皿に傷がついたんだ。ママに叱れたら責任を取ってくれよ

これはクレームなんでしょうか？

それとも笑いを取りたいんでしょうか？

そんな事よりテガ主任、開発責任者になっただから、これ位の苦

情はなんとか宥めて下さい。

「嫌味ネズミが来てましたけど、何かあったんですかー？」

リアさん、確かにテガ主任は痩せていて出っ歯でネズミみたいな顔ですけども嫌味ネズミはまずいでしょ。私は眼鏡ブタとかデブ眼鏡とか言われてるんじゃないかと心配になりますよ。

「これです」

クレームをリアさんに手渡すと

「嫌味ネズミはお馬鹿貴族のお守りも出来ないんですかねー？」

どうして女の人って、相手がいないと好き放題に言えるんでしょうか？

聞いている私の胃がもちませんよ。

「作ったのは私ですから私が何とかしますよ」

実際に私が何とかするしかないですし。

通常業務がありますから今日も徹夜ですね…

ベットが早速役に立ちました。

そう喜んでおきましょう。

s i d e リア

テガ・ラパクーリ35才。

ラパークリ男爵の長男で、それなりの魔力はある男。男爵は一代爵位だから、ごり押しに近い形で研究所に就職したみたい。

出世の基本は他人の禪な嫌味ネズミが次に目を付けたのはイ・コージさん。

ヤ・ツレ所長がイ・コージさんの实力を知っているから、良いような物のそれじゃなかったらリア特製のネズミ捕りを設置していたと思う。

「イ・コージさんおはようございます。お馬鹿対策はできましたかー？」

「ええ、ちょっと虚しい感じもしますけどね」

そう呟いたイ・コージさんの目の下にクマが見えました。

これは嫌味ネズミへの仕返しを考えなきゃ。

差し出されたフェルトを見てみたんだけども

「何も変わっていない感じがしますけど」

「変えたのは裏ですよ。ひっくり返してみてください」裏側には細かい注意書きが書かれていました。

・本品を本来の使用目的以外に使うと性能が著しく劣化するのでご注意ください

・本品を使うと剣が鋭くなりますのでご注意ください

・本品は装備品のみにご使用下さい

……イ・コージさんお疲れ様です

side イ・コージ

ホツとしたのも束の間、テガ主任がまたやってきたんです。
思わず主任の仕事の心配をしてしまいましたよ。

「イ・コージちゃん。今ヒマだね、そうだねー、僕今日行かないといけない所があるからさー、これを頼むね」

テガ主任が研究室に置いていったのは宝石が散りばめられ、美しい装飾が施された立派な盾です。

感動するぐらいに見事な丸投げですね。

「主任、これは一体なんでしょう？」

「それに軽量化・威圧・疲労回復の魔法を付与してちょーだい。材料は揃えておいたから明日までに頼むよ」

ああ、そう言えば誰かがテガ主任はレディスクラブに目当ての女性がいって通い詰めているって話をしていましたね。
既婚者で、その元気はある意味うらやましいです。

……

ざ、材料不足です。

軽量化に必要な魔石がないじゃないですか！

私に魔石を精製しろって言うんですか。

テガ主任が若い娘とお酒を飲んでいる時に私は実験器具とニラメツ

コ…

ちよつとだけ泣きたくります。

そんな時です、研究室の扉が開きました。

「もうイ・コージさん嫌味ネズミの仕事に、そんな真面目に取り組む必要はないですよー。どうせご飯食べてないんですよ。サンドイッチを作ってきたから食べて下さいー」

「リアさん帰ったんじゃないですか？」

「事務にいる友達から聞いたんですよ。嫌味ネズミがイ・コージさんに自分の仕事を丸投げしてレディスクラブに行ったってー」

恐ろしきは女性の噂包囲網。

「やっぱりそうでしたか？まっ家に帰ってもする事がないですから」

「嫌味ネズミは今頃レディスクラブで鼻の下をのばしているんですよ。悔しくないんですか？」

だからって、リアさんが怒らなくても

「ちよつだけ悔しいですよ。でもその女性はテガ主任と談笑してるんじゃないく、テガ主任のお金と談笑しているんですから。それに気付かないテガ主任こそ哀れなんですから」

研究者は何時も事実を見なきゃいけません。
昔、痛い思いをした私だから言えるんです

「随分とお人好しなんですネー」

違いますよ、そう思わなきゃやってられないんです。

「それにリアさんの優しさがこもったサンドイッチの方がレディスクラブのお酒よりも何倍も価値がありますから」

「サンドイッチで、そこまで喜ばれるとは思っていませんでしたよー」

故郷に帰れない私が女性の手作り料理を食べるのは奇跡に近いんですから

上司を選べないのがサラリーマン（後書き）

次はザコのシャルレーゼ女王とガーグのひいおじいさんの話を更新
予定です

書きためができた時点で更新します

サラリーマンのアフターファイブにはお付き合いもある(前書き)

レディス・バーはキャバクラと想ってもらえたら

サラリーマンのアフターファイブにはお付き合いもある

side イ・コージ

「イ・コージちゃん、今日の夜ヒマだよー」

テガ主任、貴方はいつも暇ですよ

「新しい依頼ですか？それなら…」

今は無理ですと、言い掛けたんですが

「依頼じゃないよ。こないだの盾のお礼にいい所に連れて行ってあげるから。じゃ後で」

テガ主任、連れて行きたい場所がバレバレです

リアさんがいる前で誘ってくれて非常にありがた迷惑ですよ

「イ・コージさんもレディス・バーに行くんですか？」

リアさん言葉の節々に棘が見えています。

「行きたくなくても連れて行かれるんでしょうね。テガ主任の魂胆が丸分かりだから断りたいんですけども」

「魂胆ですかー？」

「自分より格好悪い私を連れて行く事で自分を格好良く見せたいんでしょうね。後は専門的な質問をされて困ったんじゃないですか」

テガ主任は、一応魔法研究所の主任なんですから

side リア

イ・コージさんが嫌味ネズミの引き立て役？

冷静に見た目で判断しても人が良さそうに見えるイ・コージさんの勝ちだと思っただけと。

話なんてしたら嫌味ネズミに勝ち目はなんてないと思う。

多分、嫌味ネズミの事だから見栄を張って自慢話しかないと思うし。

そして愛想笑いを本気して1人悦にはいると。

イ・コージさんなら相手の話を聞いて終わりだと思うんだよねー。

男性としてどうかじゃなくお仕事として楽な相手はどっちかは一目瞭然。

それを分かっているイ・コージさんと嫌味ネズミじゃ勝負になる訳がないじゃない。

まあ勝負しているのは嫌味ネズミだけで、イ・コージさんにはそんな気はサラサラない様だし。

もし、もしイ・コージさんもレディス・バーにはまったら…
なんかムカつく。

side イ・コージ

テガ主任、そのファッションはきついです。

貴男は体が細いんですから、ダブダブな服を着ると余計にみすばらしく見えますって。

第一、その格好をしている若い子は前程見ませんし。

「イ・コージちゃん、あまりレディス・バーに来た事ないでしょ。僕に任せておいて」

テガ主任、そんな活気に溢れた姿初めて見ましたよ。

「はあ、よろしく願います。後明日も早いんで1時間ぐらいで帰ってもいいでしょうか？」

ぶっちゃけ、定時出勤なんですけど

「イ・コージちゃん、そんなにノリが悪いと嫌われちゃうよ。でもアフターの時には帰ってね」

テガ主任、今日は平日だからレディス・バーの皆さんも早く帰りたいと思うんですけど

「わかりました。先ずご飯はどうしますか？」

「？何を言ってるの？直行するんだよ」

いやいや、まだ準備できてないから確実に嫌がられますって

「すいません、空酒ができないんで軽く食べていきましょう」

「仕方ないなー。そんなんだからイ・コージちゃんは太るんだよ。そうだ！ピンクちゃんが言ってたパスタ屋さんに行こう」

おっさん2人でパスタですか？

それとピンクさんは絶対に本名じゃないですよ。

……

浮いてます。

周りは若い人ばかりで、私とテガ主任は確実に浮いています。それと周りからの視線がとっても痛いんですけど。

その後、テガ主任は絶対に捨てられる運命となる花束を購入。

そして満面の笑顔でレディス・バーへ。

お店の名前はプリティ・キャット、確実に本性は怖い猫さんがいます。

「いらっしゃいませ。あつテガちゃんいらっしゃい。ピンク寂しかったー」

テガ主任、今の営業トークですからね、そんなに喜ばないで下さい。

しかしよく喋りますね。

会議の時も同じぐらい喋って欲しいんですけど。

「初めまして、アクアです。お客様初めてですよね」

そしてここに来るのも最後です

「あまり賑やかな場所は得意じゃないので、私は研究室の方が落ち着きますし」

「お客様も魔法研究所の方なんですか？それなら見てもらいたい物があるんですけども」

依頼だとお金が発生しますよ。

「アクアちゃん、イ・コージちゃんは僕の部下の中でも優秀な男だから任せたらいいよ。もちろん依頼料はタダだよねイ・コージちゃん」

つまり私にタダ働きしろと。

まあ無言で飲んでるより何かしてた方が気が紛れますし

「これなんですけども。ペンダントに付与してある血流促進の魔法が効かないみたいで」

ペンダントで血流促進って肩こりでもするんですかね

「アクアちゃん胸が大きいから肩がこるんでしょう？」

テガ主任、セクハラ発言をするのは止めて下さい。

私も同じ人間に思われるじゃないですか。

……

ペンダントにはブラッディルビーがあしらわれており、その周りには魔法陣が施されていました。

「どこか明るくして大丈夫な部屋はありますか？この薄暗い中じゃ作業ができませんから」

私お客さんですよ。

作業をする場所は事務所ですか。

懐から簡易加工セット（拡大鏡・彫金タガネ・魔力テスター等）を

取り出して作業に取りかかろうとしたら

「あの私はどうしたら良いですか」

「お仕事に戻って良いですよ」

（魔力経路が欠けていますね。これなら直ぐに治せます）

「それでボーイさんにペンダントを渡して帰っちゃったんですかー？
一口も飲まないで」

リアさん人の疲れた話を聞いて喜ばないで下さい。

「戻って来たらテガ主任がハッチャケまくっていて混じる気が失せ
たんですよ」

それを聞いて更に喜ぶリアさん。

テガ主任の新しいネタを聞いたから嬉しいんでしょうか。

その日の昼の事。またヤ・ツレ所長に呼ばれたんです。

「イ・コージさん、今晚レディス・バーに付き合ってください」

この時は、あんな後味の悪い依頼に繋がるなんて、想像もしていませんでしたね。

サラリーマンのアフターファイブにはお付き合いもある（後書き）

さすがにキャバ嬢の方やボーイさんは見てないか

でも上司や妙に気合いの入った知人で行って困った事がある人はいるか

イ・コージ、新しい依頼で元気をなくする？（前書き）

明日は休みって事でイ・コージも投稿

この小説は若い人が読んで楽しいんだろうか？

高校生や中学生の人（特に女子の方）はおじさんが主役って読む気は起きないかも

でもサラリーマンに読んでもらいたくて書いた小説だし良いとしましょう

ちなみに今日は法人の飲み会、まずは理事長にビールをつぎに行かなきゃ

イ・コージ、新しい依頼で元気をなくする？

side イ・コージ

所長に連れて来られたのは昨日とは違うレディス・バーでした。
店の名前はセクシー・バタフライ。

きつとお金を持ち去っていく蝶がいるんでしょう。

「ツレ様いらつしゃいませ」

「奴は来ているか？近くの席に頼む。それと少しの間は誰も来なくていいからな」

まさか所長は常連なんでしょうか？
最後の奴って誰なんですかね？

「イ・コージさんはあまりこういう店に来ないでしょ？まあ私も接待の時しか来る気はありませんしね」

（上客の貴族や騎士への接待ですか。それと色仕掛けを使う時とかも使いそうですね）

「イ・コージさん、ルーンランドには慣れましたか？」

世間的な挨拶から何かを探るんでしょうか？

「ええお陰様で、助手のリアさんも良くしてくれますし」

「それなら安心です。この短期間で人気商品を開発してくれて感謝

をしていますよ」

誉められたからって油断してはいけません。
牽制を兼ねたジャブの後にガードを下げてくる、下手に飛び込めば
カウンターをもらいそうです

「私は開発をしただけです。後は制作部や販売部の力ですから」

そんな時です。

隣の席から若い男が大きな声で叫んだのは

「よっしゃあーあ。ダンペリ入れちゃうよ」

「キャッー、さすがはクリス君。だーい好き」

大好きなのはダンペリで入ってくるキックバックなんでしょうけども

「若いのに随分とお金持ちの方もいるみたいですね」

「クリス・アレクサンドラ。アレクサンドラ子爵家の長男です。クリス様は少し前にファイニー伯爵家の令嬢マリアンヌ様との結婚が決まりました」

所長は私にだけ聞こえる様に呟きました。
いわゆる政略結婚てやつですか。

「それなら不味いんじゃないですか？こんな場所で大金を使っている
ちゃ」

「アレクサンドラ子爵からの依頼です。レディス・バーの女に、の

めり込んだクリスの目を覚まして欲しいとの事、イ・コージさん頼めますか？」

「とりあえず詳しい状況を教えて下さい。それによって創る物が変わりますので」

「流石はイ・コージさん、詳しい資料は明日届けます。それでどうします？女性を呼びましょうか」

今、色仕掛けにのつたら断れなくなるじゃないですか

「いえ、ちょっと調べ物があるので研究室に戻ります」

イ・コージが帰った後にヤ・ツレが満足げな笑みを浮かべて呟いた。

「さてイ・コージさんは今度はどんな物を創ってくれるんでしょうかね」

所長から届いた資料によるとクリスさんはかなりのお金をつぎ込んでいるみたいです。

お目当ての女性は、お店ではアゲハと名乗っていますが本名はデボラ・ポー。

「おはようございます。イ・コージさん真剣な顔をして何を読んでいるんですか？」

「リアさんおはようございます。新しい依頼ですよ」

.....

「それで、このデボラさんとクリスさんは恋仲なんですかー？」

「いえデボラさんには、きちんと彼氏がいるそうですよ。クリスさんの片思いを利用してゐるって感じてしょうね」

「婚約者があのマリアンヌさんなら、分からなくもないですけどねー」

確かマリアンヌさんって、伯爵家の令嬢ですよ

「リアさんお知り合いなんですか？」

「昔、同じ学校に通ってました。プライドが高くて相手の判断基準は家柄とか容姿が全てな方でしたよー」

クリスさんの見た目は私よりは格好いい程度です。
しかしそれなら、何で？

「それならマリアンヌさんは今回の婚約に納得していないのでは？」

「お金ですよ、お金。ファイニー伯爵家は代々の贅沢がたたって台所は火の車、一方アレクサンドラ家は領地で金脈が見つかったお金はありますからねー。後は名誉が欲しいって所じゃないんですかー？」

マリアンヌさんは贅沢がしたいから嫁ぐと、アレクサンドラ家は伯爵の血を入れる事で自家の格をあげたいって思惑ですか。

「でもクリスさんのご両親は、なんで何もいわないのですかね？」

「言える訳ないじゃないですかー。金脈はクリスさんがダウジングで見つけたそうですよー」クリスさんに見れば金脈を見つけたばかりに、お金目当ての気位が高いお嬢様と結婚をさせられそうですね。

それで夜の蝶に逃げた訳ですか。

（所長に2人が顔を合わせる日があるか聞いておきますか。それまでにアレを作っておかないといけませんね）

アレクサンドラ家邸宅

今日クリスさんの家に、マリアンヌさんが訪問するとの事。

私は所長にお願いをして2人が過ごす予定の庭園を見下ろせるテラスに潜んでいます。

（イ・コージさん、来ました。あれがマリアンヌさんです）

何故かリアさんも付いて来てくれました。

あの方がマリアンヌさんですか…令嬢は美少女しかないというのは、庶民の幻想だった様ですね。

（それじゃ早速試してみますか）

（イ・コージさん、その指輪なんですかー？ ついてる石は水晶ですかー？）

（正解です。純度の高いクリスタルに精神反応の魔法を付与してあります。指輪にはの欲求感知の魔法陣を彫りました。だから対象者に魔力を向けると）

side リア

イ・コージさんがそう言った瞬間に透明だった水晶が金色に光りました。

（マリアンヌさんは予想通り金色ですね。クリスさんは暗い赤紫ですか…）

（イ・コージさん1人で納得していないで私にも教えて下さいよー）

イ・コージさんの説明によると、この指輪は対象者の欲求や心理状態を色で表すみたい。

金色は見栄や金欲、明るい青は癒しで暗い青は拒絶、明るい赤は情熱で暗い赤は怨恨や怒りを表すんだって。

つまりマリアンヌさんはクリスさんをお金としか見てなくて、クリスさんがマリアンヌさんに感じてるのは拒絶と怒りになるらしい。

（凄いいじゃないですか！ またヒット商品の誕生ですね）

（こんな物を買ったらみんな人間不信になっちゃいますよ）

イ・コージさんは前に友人に頼まれて同じ物を作ったんだって。

その人は奥さんが浮気をしていると心配してみたんだけども、
浮気相手は自分の実の弟。

奥さんは自分には笑顔だけど無色（無関心）、弟には綺麗なピンク
（恋心）の反応が出たみたい。

結果、イ・コージさんの友人は人間不信になり行方不明に。

行方不明になってから半年後には奥さんと弟さんが結婚していたん
だって。

確かに人間不信になる指輪じゃ売れませんかよね！。

イ・コージ、新しい依頼で元気をなくする？（後書き）

今悩んでる点

複数ヒロイン&イ・コージの暗黒面（前歴が前歴だけに）を取り入れるかどうかです。

感想お待ちしております

イ・コージの過去と闇（前書き）

昨日頂いた感想を元に話の進め方を決めました

イ・コージの過去と闇

side イ・コージ

「所長、これが今回のマジックアイティムになります。実験の結果マリアンヌさんは金欲、クリスさんは拒絶と怒りの感情を表しました。これをクリスさんに貸せばレディス・バーには通わなくなると思います」

「貸すんですか？」

「周りの人間が全てが自分に良い感情を持っているなんてありえませんからね。下手したら人間恐怖症になりかねません。レディス・バーに通わなくなっても、それじゃ意味がないですから」

自分が作った物で人が不幸になるのは、あまり愉快じゃないですし

「わかりました。クリスさんには私から新アイティムの使用モニターとして協力依頼の形で渡します」

side クリス

金・金・金・みんな僕の事を金づるとしか見てないんだ。

アゲハちゃんもマリアンヌさんも執事もメイドも……

金脈をなんて見つけなきゃ良かった。

こんな指輪の使用モニターの協力なんてしなきゃ良かった。

僕は金しか価値がない人間だなんて知りたくもなかった……

side イ・コージ

今日も所長に呼ばれました。

まさかあの指輪じゃ効果がなかったんでしょうか。

「イ・コージ君、結果だけ言うと 크리스さんはレディス・バー通いを止めた。しかし…」

あー、所長の顔が厳しいですね。

予想はしていたんですけども

「 크리스さんは、人間不信になりましたか。流石にアレクサン德拉子爵から苦情が来ていますよね」

減点物ですね。

下手したら… まあ元の木阿弥と思いましょう。

「いえ、むしろ感謝されました。マリアンヌさんも婚約を解消したみたいですよ」

それじゃ 크리스さんが人間不信になっても仕方ないですね

「親御さんも同じ穴のムジナですか。わかりました、最後まで関わるとします」

アレクサン德拉子爵にとって大切なのは家名な様です。

指輪を作った責任、そして同じ人間不信だった私には 크리스さんと話す責任がありますね。

side クリス

部屋から出るのが怖い

誰かに会うのが怖い

あれから僕は部屋から出る事ができないでいた。

そんなある日、部屋の扉をノックする音が聞こえてきた。

「クリス様、失礼します」

そう言つて部屋に入ってきたのは2人の男性。

1人はヤ・ツーレさん、もう1人は痩せたヤ・ツーレと対照的に太った中年男性。

「クリス様指輪のモニター協力ありがとうございます。開発者のイ・コージ共々こうしてお礼にをしたくてお邪魔させてもらいました」

ヤ・ツーレさんもイ・コージさんも穏やかな笑顔を浮かべている。

（あんな表情をしても、腹の中じゃ僕の事を金づるってしか見てないんだ）

でも指輪は金色じゃなく澄んだ青色をしていた…

「作った本人が言うのもなんですが、その指輪はあくまで対象者の一番強い感情を表すだけですから決して万能ではないんですよ。それに人の気持ちなんて結構変わるものですね」

「慰めですか？」

確か青は癒しの色、癒しと言えば聞こえはいいけどもそれは哀れみとも捉える事ができる。

「いえいえ、今の貴方を見ていると他人に思えなくて。おじさんの老婆心だと思って下さい」

イ・コージさんは、どこか遠くを見ながら話始めたんです。

「昔ある国に1人の少年がいました。その子は魔術の才能があり、その才能を磨く為に必死に努力をしたんですよ。友達とも遊ばず恋もしないで来る日も来る日も魔術を磨いたんです。努力は人を裏切らないと先生に言われた言葉を信じてね」

イ・コージさんは深いため息をついた後に、また話始めました。

「少年は夢を叶えて自分の国の魔法研究所に勤める事ができたんです。少年は魔術の研究に没頭し気づけばおじさんになっていました。でもある日おじさんは全てを失いました……確かに努力は裏切りませんでした。が人に裏切られちゃったんですよ」

「裏切られたって、何があっただんですか？」

多分そのおじさんはイ・コージさん……

「上司に研究成果を奪われたんですよ。しかも歪な方に変えられてね……他人を信用できなくなったおじさんは研究成果を持ち出して研究所から逃げたんです。」

研究成果が欲しい上司は追っ手を差し向けてきました。殺してでも

奪えって命令をしてね」

イ・コージさんの顔が闇に包まりました…

「自衛とは言え人を殺めたおじさんは故郷にも人の群れにも戻れなくなつて孤独となり、終いには冒険者に討伐をされて地下牢に入れたってしまったんですよ。でもね貴方は裏切られても誰も傷つけなかった、だから大丈夫です。そのおじさんも違う国で頑張っています。だから貴方も歩きだして下さい」

side イ・コージ

「クリスさん大丈夫ですかね…」

「後は本人次第でしょう。それよりも困った人が着いて来ていますね。あそこの路地に入つてお話を聞きますよ」

やれやれ、所長は面倒事は早めに潰すタイプなんでしょう

路地に入つて人氣が途絶えた時です

「レイジー、アイツだよ。あの親父が来てからカモも来なくなつたんだよ」

あれはクリスさんがはまっていたアゲハとか言うレディス・バーの隣のレイジーって言う人が彼氏、所謂ヒモらしいです

「おっさん達が余計な事したせいだよー。デボラが稼げなくなちゃったんだぜ。責任をとって金をよこしな」

「お金なら自分で働いて稼いで下さい。貴方みたいなお子様なら親御さんからお小遣いをもらうのが一番でしょうけども」

「ああん！ガキ扱いしてんじゃないよ。俺はキレたらやばいんだぜ、素直に金をよこしな」

貴方の言動がお子様そのものなんですけどね

「所長どうしますか？」

私は立場上、公的機関とは関われないますから

「後始末は私がしますのでイ・コージさんの力を見せて下さい」

「おっさん俺は人を殺した事があるんだぜ！殺されなくなったら素直に言う事を聞きな」

ナイフを抜きましたか……

「嘘ですね。人を殺めた人間はそれを手柄みたいに吹聴しませんよ。それに貴方には人を殺した暗さがありません」

イ・コージの顔が暗い闇に包まれる。

目に至っては深い洞穴を思わせる無限の闇を連想させる程に冷たく暗い物となっていた。

「お望み通り、私は貴方を1人の大人として扱います。だからきちんと責任をとってもらいますよ」

side ヤ・ツレ

イ・コージさんは袖を捲り上げましたね

（あれはブレストがですか。埋め込んであるのは触媒の魔石ですね）

その中にある黄色い魔石にイ・コージさんが、触れるとレイジーを黄色いガスがを包み込みました。

（あれが報告書にあったイ・コージさんの気体魔法ですか）

「えっ！レイジー何したの？」

レイジーは床に倒れ込み涎を垂らして呻き声をあげています。
あれは恐らく

「殺す価値もなさそうなので、麻痺性の気体魔法で大人しくなってもらいました」

イ・コージさんの声には一切の感情がありません。

「なんで、こんな酷い事をするの？レイジーは、まだ何もしてないじゃない」

「貴女は馬鹿ですか。何かされたら困るから麻痺させたんですよ？ご希望なら腐食魔法で顔を潰してあげますよ。もちろん貴女も一緒

にね」

女性の悲痛な叫び声に反比例するかの様にイ・コージさんの声は冷たくなっていきます。

「やめてっ。謝るしお金も払うし何でもするから」

「自惚れないで下さい。私は貴女に価値を一切感じていません。貴方達は大人なんでしょう？社会のルールから逸脱しておいて被害者面をするもんじゃありません。後は私の後ろにいる方が貴方達に処断を下してくれますよ」

（流石は元死刑囚ですね。普段の温厚な顔の下には酷薄な獣が眠っていましたか。これなら違ってお仕事も頼めるでしょう）

女性が私を哀願するような目で見てきています。

この2人の使い道ですか……

「貴方達2人には鉱山で働いてもらいます。肉体労働をしてお金の大切さを学んで下さい」

イ・コージの過去と闇（後書き）

感想お待ちしております

おじさんは若いアイドルの話をされると困る（前書き）

ちよつと作者の実体験が元になっています

おじさんは若いアイドルの話をされると困る

side イ・コージ

今日も呼ばれました所長室。

所長絡みの依頼はハードルが高いのが多いから正直勘弁して欲しいんですけどね。

「失礼しますイ・コージですが」

「良く来てくれたね。まあ立ち話もなんだから掛けて下さい」

所長は穏やかな笑顔で出迎えくれました。

でも油断しちゃいけません。

所長は同じ笑顔でレイジーさんとデボラさんを山奥の鉱山に送ったんですから、しかもアレクサンドラ家所有の鉱山にです。

クリスさんは穏やかな性格で鉱山で働く人に慕われていたみたいですから、どんな事になっているか想像もしたくないですね。

「イ・コージさん、前に作ったゴブリンバイバイを人に応用できませんか？開発期間はお城でのダンスパーティーまで」

ほら来た、ダンスパーティーまで2週間しかないのに笑顔で無茶振りをするんですから。

「内容によります。ゴブリンバイバイを応用した物は使い方によっては大変危険ですから」

「相変わらず慎重ですね。ところでイ・コージさんはマジックガー

ルズはご存じですか？」

「いえ全くわかりませんけど」

「今ルーンランドで大人気のグループアイドルですよ。ダンスパーティーではマジックガールズのコンサートもあるんですけども、彼女達のファンはちょっと暴走気味でしてね。ステージにあがろうとしたりするんです。流石にお城で、それはまずいですから」

傭兵隊や魔術師隊の皆様がガードをするとファンが萎縮するから無理でしょうね

「それで人間用の結界が必要な訳ですか。でもお城にくる人なら自重するんじゃないですか」

いくらお花畑騎士団の方でも王様の御前で暴走はしないでしょ

「今回のダンスパーティーは年に1回だけ一般市民がお城に入れる日なんですよ。楽しみにしている市民が多いから中止にはできないんです」

ちなみに入場条件は無腰である事だそうです。

「ファンがステージに近づかなければいいんですよ」

しかもコンサートの邪魔をしない様にですよ

「それともう一つクリスさんが、こないだの指輪を貸してほしいそうです」

おじさんの気持ち伝わらなかったんですか

「それは何か訳があるんですか？」

「今回のダンスパーティーは女性が男性をダンスに誘うんですよ。市民の女性が貴族を誘って結婚したなんて話もありますから」

なんでしょう、そのモテない男性への嫌がらせみたいなパーティーは私は普通のパーティーでもあぶれた男性だけで飲んでるんですよ

「つまり婚約を解消したクリスさんにお誘いが集中するって事ですか。殆どは財産目当てだからフルイにかけたといって事ですか」

願わくは純粹にクリスさんを慕う女性に来て欲しいですよ

「ええ、婚約解消の話は既に町中に広がっていますから。

それに1度成立したカップルはダンスパーティーが終わるまで解消できません」

お誘いが来ない私には関係ない情報ですね。

それにダンスパーティーには出席しませんし。

だってデュークセン関係の人が来ていたらマズいじゃないですか。

「分かりました。後から指輪を持ってきます」

今の私にできる事は誰かが幸せになる為のお手伝いですしね。

所長室から帰る廊下でテガ主任に会っちゃいました。

「イ・コージちゃん。見て見て、ダンスパーティー用に新しいスーツを作ったんだ」

主任、既婚者がその気合はまずいんじゃないですか

「はあ、ダンスパーティーに奥様はいらっしゃらないんですか」

「……当然うちの奥さんも来るよ……」

あつ主任のテンションがダウンしました。

「お仲がよろしい様で羨ましいですよ」

「仲が良い？ご飯も作ってくれないのに……僕の目当てはマジックガールズだよっ！」

そりゃアイドルに夢中の旦那にはご飯は作りたくないかと

「マジックガールズってそんなに人気があるんですか？」

流石に私の年になるとアイドルに興味はないですし

「……人気？なに当たり前の事を言ってくれちゃっているの？初期メンバーからのファンの僕の前でそれを言うかい？いい、分かった。テガ主任のマジックガールズ講座を開始してあげる」

……

主任の魂の叫びは約1時間続きました。

私の頭に残った情報は、今のマジックガールズは3期メンバーで、猿人族アリスさんとキャロルさん

エルフのフローラさん

犬人族のチエルシーさん

猫人族ソニアさんの

5人構成だと言う事だけです。

主任は歌や5人の誕生日や趣味・特技を熱弁を振るって教えてくれたんですね。

でも収穫がありましたよ、主任の熱狂振りはマジックアイティムを作る際の参考になりますから。

「イ・コージさんお帰りなさい。随分と遅かったですねー」

「そこでテガ主任に捕まりまして、1時間程マジックガールズの講習会を聞かされましたよ」

「マジックガールズですか。イ・コージさんも好きなんですか？」

大変です、リアさんが誤解をしているみたいです。

「所長に言われるまで知りませんでしたよ。まあ主任の熱狂振りは今回の依頼の参考にさせてもらいますよ」

「確かにマジックガールズのファンは怖いぐらいに熱狂的ですからねー...」

「今回の依頼はそのファンの方々を抑える物です。私は2週間の間は残業をしていきます」

「イ・コージさん忙しい所をすいませんが私からの依頼も受けてくれませんか」

リアさん私に2週間お泊まりをしろと？

おじさんは若いアイドルの話をされると困る（後書き）

マジックガールズで設定があるのは1人だけです
今回は叩かれる内容だったかも

助手からの依頼

side イ・コージ

「リアさん、それで依頼というのは何でしょうか」

「女の子が人混みの中を誰にも気付かれずに移動する手段が欲しいんですけど。例えばダンスパーティーとか」

リアさんにも誘いたい男性がいるんですね。でも何故か寂しい気持ちになりました。

「詳しい事情を教えてくださいませんか？それによって創る物が違いますから」

「絶対に内緒にしてもらえますか？」

「お任せ下さい。可愛い助手の幸せには協力を惜しみませんよ」

「ち、違いますよー。使うのは私じゃないですからー」

何でしょう、このホッとした気持ちは。

「そ、そうですか。それは早とちりしましたね。それじゃ改めて事情を教えてください」

「明日、本人を連れて来ますのでー。その時にお話します」

それじゃ今日は結界の開発をしますか。

――――
次の日の夜

リアさんは定時で帰宅しました。

多分お友達を迎えに行っただんでしょね。

……

何でしょう。

あの過剰包装みたいな服を着た方は。

「チエルシーちゃん、もう大丈夫だよー」

「先輩、本当に大丈夫なんですか？」

依頼者の方は、ようやく過剰包装を脱いでくれました。

中から出てきたのはショートカットで黒髪の元気の良さそうな娘。

あれは犬耳ですかね？

犬人族の娘さんなんですよ。

「先輩って事はリアさんの後輩ですか。良かったら事情を話して下さい」

「先輩、顔を出したのに全力でスルーをされました。僕はまだ無名なんですわっ！」

いや初対面なんですから当たり前でしょ。

「チエルシーちゃん、イ・コージさんは昨日までマジックガールズを知らなかった人だから」

「リアさん仕方ないでしょ。私はアイドルとか興味ないんですから。それじゃチエルシーさん事情を話して下さい」

「先輩、興味がないって言われた上に僕の名前を呼んでも気付いてないです。あれはわざとなんですか」

「あれがイ・コージさんなの。私が説明してあげるからねっ」

何でしょう、この珍獣扱いは。

気まずいです。

リアさんの後輩がマジックガールズのチエルシーさんだったなんて、私、人気アイドルの前で貴女を知りませんって言っちゃったんですよ。

「それでリアさん詳しい事情を教えてくださいませんか？」

チエルシーさんは若干涙目なんですよ。

犬人族の特徴の耳もしおれちゃっていますし。

「えっとチエルシーちゃんは一昨年までアレクサンドラ家にメイドとして仕えていたんですよー」

「アレクサンドラ家ってクリスさんの御実家のアレクサンドラ家ですか？」

「クリス様はアレクサンドラ子爵の嫡男です。さん付けは無礼ですっ！」

チエルシーさん、そんなにムキにならなくても、犬耳がピンツと立つちやてますよ。

「チエルシーちゃん、まだ言ってなかったけどもイ・コージさんは私の上司なだけじゃなくクリスさんの大恩人なんですからねー」

……………

「も、申し訳ございません。知らぬ事とは言えクリス様の恩人に無礼な口を聞いてしまい…それしにしてもレディス・バーの女といいファイニー家の馬鹿娘といい僕がお側にさえいればクリス様に近づけさせなかったのにー。よくも僕のクリス様をー絶対に許さないっ」

「えーとリアさん、チエルシーさんが誘いたい相手ってクリスさんですか？」

「チエルシーちゃんは昔からクリスさんを慕っていたんですけども、メイドと嫡男じゃ釣り合いがとれないって理由でアイドルになったんですよー」

主任が聞いたら発狂しそうな理由ですね。

「チエルシーさん貴女がクリスさんを慕う気持ちによこしまな物はないですよね」

「当たり前です。クリスマス様はメイドの僕に勉強を教えてください、美味しいお菓子をくれたり、僕が熱っぽい時なんて内緒でご自分のベッドで休ませてくれた人です。僕は事務所の社長よりもファンよりもクリスマス様が大切なんですっ！」

主任すいません。

クリスマスさんとチェルシーさんの幸せの為に本気を出させてもらいます

「リアさん、これから2週間私の食事を研究室に届けて下さい。私はダンスパーティーまで研究室にこもります」

罪滅ぼしにはなりませんが不幸を減らして幸せを創らせてもらいます。

side リア

「イ・コージさんって不思議な人ですね。僕より依頼内容に興味を持たれるなんてアイドルとしては悔しいんですけど」

「イ・コージさんはアイドルだけじゃなく、下手したら自分の幸せや健康にも興味が無い人だからねー」

下手したら魔術研究以外は興味が薄いかもしれない

「でも先輩はイ・コージさんに興味があるんですよ？まさかあの先輩が甲斐甲斐しくお料理を作るなんて驚きです」

「それも助手のお仕事。それにイ・コージさんはほつといたらパンだけの食生活になっちゃう人なんだからー」

しかも食べながら製図を書いたり魔法陣を彫ったりするしー

「僕はあの人なら先輩を理解してくれると思いますよ」

「人の心配よりもー自分の事を考えなさいー。私やイ・コージさんにできるのは、あくまで移動手段だけなんだからね」

さて、私は上司の健康の為に野菜を買って帰りますか。

助手からの依頼（後書き）

ちなみにリアの髪の色はピンクです

イ・コージもいつか1日2話更新してみたい

ダンスパーティーに縁がなくても頑張るのがイ・コージ（前書き）

かなり悩んだ展開なのでつつこみはご勘弁を

ダンスパーティーに縁がなくても頑張るのがイ・コージ

side イ・コージ

さてあんな風に言ったものの具体策が決まらなと付与する魔法が絞れません。

まずは主任の依頼。

・コンサートの邪魔にならない物でなくちゃいけません
だから防御壁系は却下ですよね

・コンサートを楽しんでもらわなきゃいけません

だから威圧や恐怖の魔法は使えないし、テンションを下げる沈着も駄目ですよ

・暴走したファンでも怪我はさせれない

つまり攻撃魔法や麻痺も使えません。

・ゴブリンバイバイはゴブリンと違って人間を操作するのは不可能ですから却下

… どうしましょう。

2週間泊まり込みで間に合うんでしょうか。

ただでさえ最近、運動不足でぽっちゃりに磨きが掛かっているのに…。

お腹です、私の柔らかいお腹を参考にすれば。
考えがまとまった物から取りかかりますか。

……………

完徹の結果、理論はまとまりました。

まあ、ようやくスタート地点にたどり着けただけなんですけどね。

次にあれを取り寄せてくれるか所長に聞いてみないといけません。幸い、所長の出勤時間はかなり早いですから今なら確実に会えます。じゃないとアポをとるだけで一苦労ですから。

そして珍しく自分の意志で所長室にやって来ました。

今回使いたい物は決して安くはない物ですから許可がおりないと新しく考え直しになります。

「…と…を使って対応してみようと思います」

「そう来ましたか。確かにそれなら近付けませんね。わかりました、なるべく早く取り寄せますね」

OKがでたからと言って安心してはいられません。

ここからが本場なんですから。

使う物が高価ですから机上の空論で終わらせる訳にはいかないんです。

「イ・コージさんお早うございます。せっかく朝ご飯作って来たのにどこに行ってたんですかー？」

「リアさんお早うございます。所長経由の依頼に使いたい物品の申請に行ってたんですよ」

「コンサートを守る為の依頼ですよねー、ご苦労様ですー。これはチエルシー達にお礼を言わせに来なきゃ駄目ですねー」

「それは必要ないです。第一若い娘さんに来られても困るだけですから」

人が訪ねて来るだけでも面倒なのに、テガ主任なんかに知られた、面倒臭い事になりますよ

「マジックガールズに会いたくないって人も珍しいですよー。あつ今お茶をいれますよー」

チエルシーさんがいるからでしょうか？

リアさんはマジックガールズに関心が高いんですよ。

リアさんはお茶と一緒に朝ご飯の準備もしてくれました。

野菜をはさんだサンドイッチにサラダに野菜スープを美味しくいただきました。

体が喜ぶって感じですよ。

「ところでチエルシーちゃんの件は難しいですか？」

「ええ、人混みを移動してチエルシーさんだとばれてしまうとパニックになってしまいますからね」

先までコンサートをしていたアイドルがパートナーを誘いに来たりしたら大混乱になるでしょうね。

「隠密系の魔法は使えないんですかー？」

「あれは人が少ない場所では効力を発揮しませんよ。だって人混みだと周りから人だと認識されていないと移動その物が不可能になりますから」

人がいると思うから避けてくれるですし、クリスさんを誘う人が列をなしていたら、並ばなきゃいけないんですから。

「変身魔法は駄目ですかー？」

「クリスさんにチエルシーさんだと認識してもらわなきゃいけないんですよ」
変身したチエルシーさんをクリスさんが受け止めても意味ないですからね。

「なんか大変ですー。報酬はいくら必要ですかー？」

「報酬は成功報酬でリアさんが決めて下さい。私はリアさんのご飯も報酬だと思っていますし」

若い女性の手作りご飯なんて、2度と食べれないと思います。

「イ・コージさんご飯のハードルをあげないで下さいよー。出来合いのお弁当にしちゃいますよー」

「私はリアさんが作ってくれるのが嬉しいんですよ」

出来合いのお弁当なら普段の食事と変わらないですし。

「うー、何品かは出来合いのおかずにしちゃいますよー」

まあ、それでもリアさんが作ったお弁当になりますからね……

「それです！リアさん今の言葉で解決策を思いつきました。そう！チエルシーさんに、こだわらなくても良かったんですよ」

それじゃ先ずアレを手に入れなきゃいけません……

でも正式な依頼じゃないですから自腹を切らなきゃいけないですよ

「解決方法が見つかったんですねー。良かったー」

リアさんは自分の事の様に喜んでいます

「ええ、早速とりかかりますね！」

「駄目ですっー。先ずは少し寝て下さいー。イ・コージさん昨日も徹夜したんですよ」

「何を言ってるんですか。どこに証拠があるんです？」

「私が昨日取り替えたシートにシワできていなかったんですよ。健康管理も助手のお仕事ですー。きちんと寝て下さいね」

なんでしょう、今日のリアさんは強気です。

「大丈夫ですよ。前も良く徹夜明けで仕事をしてましたし」

「前は前ですー。私がいる限りきちんと睡眠時間はとってもらいますー」

「それなら30分程、横になりますね」

「3時間は寝て下さい。私がきちんと起こしてあげますから」

「わかりました。それならリアさんチエルシーさんに似合うバングルのデザインをお願いします。素材は…と銀を使用しますんで」

私がデザインなんてしたら味気ない物を作っちゃいますからね。

ダンスパーティーに縁がなくても頑張るのがイ・コージ（後書き）

お腹との答えは次話で、書き終えたら更新するか悩み中です。
感想指摘お待ちしております

おじさんとダンスパーティー

side イ・コージ

なんとか、本当になんとか間に合いました。

納品できたのがコンサートに使用する物が前日で、チェルシーさんのバンブルに至って当日になっちゃって、リアさんに届けに行ってもらっています。

そして今はもうお昼過ぎ、とてつもなく眠いです。

ぶっちゃけダンスパーティーになんて出る必要ないですから。寝ます、これから明日の朝まで爆睡します。

そう思った矢先です、所長が訪ねてきました。

「イ・コージさん、今日のダンスパーティーには是非出席して下さい。場合によっては現場で指示してもらいたいですから」

「しかし所長、私はスーツなんて持っていませんよ」

あるのは着古したローブだけですし。

「そんなに着飾っている人は少ないですからローブならまだ間に合いますよ。新品のローブを着ていたらダンスパートナーに誘われるかも知れませんし」

絶対にはずれです。

顔見知りの女性は殆どいないんですから。

「分かりました。自分で開発した物には責任を持ちたいので、新しいロープを買ってお城に行きます」

……

久しぶりに新しいロープを買いました。
色は地味さが私にぴったりな茶色です。

……

ルーンランドのお城は、デクセンの無骨なお城と違いドーム型をした建物が巨大な魔法陣の上に建てられていました。
今日ダンスパーティーが行われるのは、そのうちの晩餐会等を行っている建物で行われるそうです。

所長の嘘つき。

周りの人達は思いつ切り着飾っていますよ。
思わずに受け付けに、

「魔法研究所の者です。昨日搬入したコンサート用のマジックアイ
タイムのチェックに来ました」

必要以上に大声で説明しちゃいましたよ。

………

建物は魔法が付与された石で造られていました。
可動式の壁でイベント会場、ダンスフロア等と区切れております。
私がいるのは庶民用の待機スペース、まあ立ちっぱなしです。

そこでただ今、異国に独りぼちな事を実感しております。顔見知りの同僚は恋人や家族で来ていましたし、所長は接待席にいるから近付けません。テガ主任は妙に派手はハッピーは着て応援の練習をし

ていました、気付かれた終わりです。

帰ろつか悩んでいる私に声がかかりました。

「あつ、イ・コージさんじゃないですか？良かったら隣に座りませんか？」

クリスさんです。

クリスさんが貴族席に誘ってくれました。

貴族席は他の場所から少し高くなっており、コンサート会場も見えます。

おじさん貴方の為に頑張ったのは間違いじゃありませんでした。

「イ・コージさんとダンスパーティーで会えるとは思いませんでしたよ」

ちなみにあの一件以来、クリスさんに慕われたのか時々アレクサンドラ家のマジックアイティムのメンテナンスに呼ばれています。

「来るつもりはなかったんですけどね。マジックガールズのコンサート関連で私の開発したマジックアイティムを納めましたので」

side クリス

マジックガールズか。

チエルシー元気にしているかな？

「それで今度はどんなアイティムを開発したんですか？」

「ファンの暴走対策アイティムですよ。ここからも見えます。ほら

っステージ前にあるあれですよ」

イ・コージさんの指さす先にあったのはパンパンに膨らんだ巨大な皮袋です。

「あれは皮袋ですか？」

「ええ、ジャイアントシープの皮を加工した物ですよ。効果はコンサートが始まったら分かりますよ」

コンサートが始まって少しした時です。

暴走したファンがステージに上がろうとしました。

（チェルシー逃げて…えっ？）

ファンが皮袋に体重を預けると、ズブリと沈んだかと思うとゆっくりと跳ね返されました。

何人行っても結果は同じです。

皮袋の反発力に逆らえずに押し戻されて他のファンの冷たい目線に晒されてしまい、諦める。

その繰り返しでした。

「イ・コージさんあれは？」

出来に満足したのか、イ・コージさんが嬉しそうに答えてくれました。

「あの中にはスライムが入れてあるんですよ。暗闇を好む性質のスライムに低反発等の魔法を付与してあります」

「スライムってあの洞窟にいるドロドロした魔物ですか？」

「そうですね。スライムは付与魔法の影響を受けやすいんで魔法の効果確かめるのに良く使われるんですよ。今回付与したのは低反発と衝撃吸収・軟体化・結合です」

イ・コージさんの説明によると皮袋の中のスライムは1つの個体に結合して、衝撃が加わると吸収し、その物体をゆっくりと押し返すとの事。

「イ・コージさんありがとうございます。お陰でマジックガールズは無事にコンサートを終えたみたいです」

side イ・コージ

凄い行列です。

クリスさんの前には何十人も女性が列をなしています。でも指輪の反応は見事なまでに金欲を示す金色ばかり。流石にクリスさんの顔にも疲れが浮かんできました。

……あの髪の長い猿人族の女性がチエルシーさんですね。

side チエルシー

リア先輩からもらったマジックバングルのお陰で僕は誰にも気付かれずにクリス様の近くまでこれた。

でも

（あークリスマス様が疲れちゃっているー。みんなお話が長過ぎなんだよー、それに香水を付けすぎ。クリスマス様は香水の臭いが嫌いなんだからー。クリスマス様待っていて下さい、僕がお側にいけば大丈夫です）

「あ、あのクリスマス様は僕が誰だか分かります？」

忘れられていたらどうしよう？

気付かれなかったらどうしよう？

断れたらどうしよう？

僕は怖くて目を伏せてしまう。

「チエルシー？チエルシーなの？」

久しぶりに聞くクリスマス様の暖かい声が僕の胸に沁み込みます。

「そうです、僕です。クリスマス様の一番のメイドのチエルシーです」

もう僕は嬉しすぎて尻尾が痛いぐらい振ってしまうのも止められせん。

「チエルシー、コンサート疲れたでしょ。良かったら座らない？」

I WIN!!!!

僕は後ろに並んでいた、女達に勝者の笑みをくれてやりクリスマス様の隣に座った。

side クリス

金、金、金あの時と同じく指輪の光は金欲を示す金色ばかりでした。その時指輪が暖かなピンク色の光を放ったんです。

そこにいたのは元メイドで今はアイドルのチエルシーでした。

あの頃と同じ笑顔で僕の隣に座るチエルシー。

ショートパンツから出た犬人族の特徴の尻尾がブンブンと激しく振れていた。

「クリスマス様、僕と一緒に踊って下さい」

夢じゃないよね？

「チエルシー、僕と踊って平気なの？」

「はい！このバングルのお陰です」

チエルシーが見せてくれたバングルには小さなルビーで可愛いチューリップが形作れていた。

「それはマジックアイティム？」

「そうです。イ・コージさんが作ってくれました。これを着けているとクリスマス様以外の人には僕が他人に見えるそうです！それと赤いチューリップの花言葉は僕の気持ちです……クリスマス様が教えてくれたんですよ。赤いチューリップの花言葉は愛の告白だって」

僕は返事の代わりにチエルシーを抱きしめた。

side イ・コージ

クリスさんとチエルシーさんの笑顔を見ただけでも、ダンスパーティーに来た甲斐がありました。

例え隣にいるのがダンスパートナーじゃなくこの人でも。

「イ・コージちゃん、一人で寂しそうだから来てあげたよ」

（奥さんに叱れて逃げた癖に、主任は相変わらず調子が良いですね）

「イ、イ・コージちゃん。こっちに歩いて来るあの美人は知り合いな訳ないよね」

主任が言った先にはピンク色の髪をした女性がいて、こちらに歩いて来ます。

確かに主任が騒ぐだけあって、その女性を見た殆どの人が美人だと認めるでしょう。

女性は私の前で立ち止まると白い手を差し伸べてくれて、こう言いました。

「良かったら私と踊ってくれませんか？」

「私で良ければ喜んでお相手しますよ」

私は彼女の手を取ると、一緒に歩き出しました。

「ちよつ、イ・コージちゃん。その人は誰なの？それより僕を一人にしないで奥さんに叱れちゃうんだから」

……

私と彼女は音楽にあわせて踊り出した。

「何で知らない私の誘いにつてくれたんですか？」

私が気付いてないとおもってるんですか

「これが成功報酬だと思ったからですよ。助手のリアさん」

「うー、つまないですー。イ・コージさんは謎の女性とのダンスを楽しもって気持ちはないんですかー？」

「そんな人の誘いなんて怖くてのれませんよ。リアさんだから誘いに応じたんですよ」

「そんな事を言っても誤魔化され不了ですよ。でも何で分かったんですかー？」

「髪の色も背丈も魔力も一緒ならわかりますよ。それに微かに薬品の臭いがしましたから」

「具体的過ぎますよー。普段から見てるから分かりましたとか言ってくれないんですかー？…チエルシーちゃんの件、ありがとうございました。でもどうやってクリスさんだけがわかる様にしたんですか？」

「チエルシーさんのバングルには触媒のナチュラルルビーが持つ変身の力を応用した誤認魔法だけです。私がいじり直したのクリス

さんの指輪です。あの指輪に誤認魔法を無効にする魔法を付与しておきました。あの2つのマジックアイティムがある限りクリスマス達はデートをしてもばれませんよ」

クリスマスさんに贈れるおじさんからのプレゼントですよ

おじさんとダンスパーティー（後書き）

チエルシーが書いていておもしろいんです。
レギュラー化しようかな

実習生〃胃痛 おじさんが調子悪い時には胃に優しい物を（前書き）

またチエルシーが出て来ます

実習生Ⅱ胃痛 おじさんが調子悪い時には胃に優しい物を

side イ・コージ

最近、私の頭の中では所長室に呼ばれるⅡ徹夜しなきゃ間に合わない無茶振りの依頼が来るっていう図式ができています。

でも、今度は

「実習生の受け入れですか？」

「ええ、国立魔法学院に通われている学生です。是非イ・コージさんの元で勉強をしたいとの希望がありました」

「所長、無理ですよ。私の立場を考えて下さい。それに今の子とコミュニケーションをとるなんて無理です」

私は他国の犯罪者なんですから

「その点はご安心下さい。それに話を聞くとイ・コージさんにも責任があるみたいですから」

はい？

「おはようございます！イ・コージさんリア先輩、今日からよろしく願います。僕頑張りますから」

私の研究室に希望を出して来たの実習生は、チエルシーさんでした。何でもマジックガールズはルーンランドに多くある魔法関連学校の成績優秀者から選ばれた娘達だそうなんです。

ちなみにチエルシーさんは、魔法の才があるからと言ってクリスさんが魔法学校に通う様に勧めてくれたとの事。

アイドルと言えども学生、魔法関連の実習をする必要に迫れて選ばれたのが私の研究室。

理由は明快リアさんがいるからだそうです。

それなら

「リアさんチエルシーさんの教育担当をお願いしますよ」

「えー、ここは室長であるイ・コージさんが担当すべきじゃないですかー?」

「私は室長兼設計担当兼作業員なんですよ。リアさんが分からない所は私が教えますからお願いします」

まあ、正直に言うコミュニケーションをとる自信が全くないだけなんですけどね。

「うー、分かりました。今の依頼は鉦夫が安全に採掘をする為の作業着と新しい採掘の道具の開発ですよねー?」

その話を聞いたチエルシーさんの尻尾がピクンツと反応しました。

「イ・コージさん、もしかしてもしかして、その依頼主様は?」

「ええ、クリスさんですよ。少しでも鉦夫の方達の仕事を楽にした

いからと依頼をされまして」

「さっすがークリス様、そのへんの馬鹿貴族と違ってお優しいんだからー。これは絶対に頑張りましょう、リア先輩僕はまず何をすればいいんです？」

チエルシーさんの犬耳と尻尾が誇らしげにピンツと立ちました。

「チエルシーちゃん、まずは落ち着きなさいー。今の採掘道具のマイナス点をまとめるわよー」

「わかりましたっ。不肖チエルシー・ポン、内助の功を発揮しまくってみせます」

なんでしょう、チエルシーさんの純粹過ぎる気合いが私にプレッシャーを与えます。

おじさんは汚れまくった生き物なんですから、そんなに純粹だと、いたたまれなくなるんです。

失敗してもチエルシーさん泣かないですよね…

2人が集計作業に入った時です。

研究室の扉がノックされて事務員さんから所長室に向かう様に言われました。

追加依頼じゃないですよね。

「イ・コージです。失礼します」

所長室に入ると、部屋には所長の他に眼鏡をかけた神経質そうなスーツを着た男性がいました。

「イ・コージ君、こちらはマジックガールズのマネージャーをされているザギン・シースさんです。チエルシー・ポンさんがイ・コージさんの研究室で実習をするお礼を言いたいそうです」

「ヤ・ツレー所長、この男は大丈夫なんですか？最初に言っておく。チエルシーはうちの大事な商品だ、変な噂や変な虫がついたら責任をとってもらうからな。それと間違ってもチエルシーに変な気を起こすなよ」

「いやー、クリスさんは変な虫じゃなく好青年ですよ。

でも私がお宅の大事なアイドルさんの恋愛にアシストした事実とは変わらないですよね。」

「ご安心下さい。女性の助手を教育担当につけましたから。私も自分の仕事がつまっていますので、お話をする余裕なんてありませんのでね」

「全く、実習より仕事を優先させたいのに。折角バカなファンを抑えられるマジックアイティムが見つかったんだから」

「マジックアイティムって、こないだお城でやったダンスパーティーで使われた物ですか？」

好機が見えました。

この好機を活かしないと、私の疲れている胃がまずい事になりそうです。

「そうだよ。あれがあればガードマンの人権費も抑えられるからな。ヤ・ツレー所長、是非とも正式な契約をお願いします」

所長が私に目配せをしてくれます

「先程も言いました様に、あれは開発者しか扱えません。だから開発者が首を縦にふらない限り無理なんですよ。でもその可能性は低くなりましたけどね。開発者はそこにいるイ・コージさんなんですから」

なんでしょう、この重い空気は……

「そしてチエルシーさんが、研究所まで安全に通える様にしてくれたバングルもイ・コージさんが作ってくれた物です」

所長は、クリスさんから色々聞いたんでしょうね……

「私は現場の人間ですので細かい交渉は所長にお任せします。ただ社会人として最低限の礼儀をわきまえていない方とお仕事をするつもりはありませんので。それでは実習受け入れ先としての挨拶は終わりましたので失礼いたします」

……採掘道具と一緒に胃薬を作ります。

研究室に戻ると、チエルシーさんが誇らしげに待っていました。

「イ・コージさん！データをまとめました！」

やる気が満々ですね。

それならまずは作業着からです。

抗内は岩が剥き出しの為に作業中や転倒時に怪我をしやすいとの事。

「はいはい。金属鎧に軽量の魔法を付与したら駄目なんですか？」

チエルシーさん、学校の授業じゃないんですから

リアさんに目配せをしましたけども、目を逸らされました。

「抗内は狭い所もありますから鎧は邪魔になっちゃいますよ」

それにもう1つ問題があるんですよね。

「所長、それなら魔物の皮を仕立ての材料に使うのは駄目ですか？」

それも同じ問題で却下なんですよね。

「魔物の皮は結構値が張るんです。揃えるのにお金が掛かりますし、転売・強奪の危険性があるんですよ」

後から古着屋に行ってみますか。

次は採掘方法ですね。

「それではリアさん採掘のリスクを教えてください」

「岩盤の硬い場所の採掘も問題ですけど、一番は排水ですね」

「爆破魔法を使っちゃ駄目なんですか？」

「狭い抗内で爆破魔法を使ったら爆風をもろにくらっちゃいますよ。それに落盤や水害に巻き込まれる可能性が高くなります」

「うーん、難しいんですねー。でもクリス様が言っていました、イ・

「コージさんは凄い人だつて。だから大丈夫です」

私を信じてじゃなくクリスマスさんが言ったから、期待をしてくれるんですね。

「リアさんはすいません。お昼は胃に優しい物にして下さい、それとまた泊まりますので」

「分かりましたー。助手の優しさがつまつた野菜スープとマッシュポテトを作つてあげますよー」

リアさんに見捨てられない様にお礼をしなくちゃいけまんね。食事は断られるかもしれませんがチエルシーさんに相談しますか

実習生Ⅱ 胃痛 おじさんが調子悪い時には胃に優しい物を（後書き）

チエルシー以外のマジックガールズのメンバーどうしよう。

1人は絡む構想あるけども、そうしたら他のメンバーも出したくなるかも

おじさんも時には厳しくなり、周りの空気を壊します（前書き）

この作品の舞台は価値観が現代と違います。

おじさんも時には厳しくなり、周りの空気を壊します

side リア

研究所に向かおうとする私に元気のかたまりの様な声が掛かる

「リア先輩おはようございます。今日もよろしくお願いします」

「チエルシーちゃんおはよ。随分と元気がいいわね」

「だって、周りを気にしないで歩けるなんて久しぶりですから」

今のチエルシーちゃんは道を歩く人の目にはマジックガールのチエルシー・ポンじゃなくて猿人族の娘にしか写っていないだもんね！。

「そうだよね！アイドルは大変なんだよね」

「でも今の僕はただの実習生ですから。イ・コージさん答えを見つけてみたかね？」

「答えは分からないけどーイ・コージさんが今どうなっているかは予想がつくよー」

「どうゆう事ですか？」

「絶対に爽やかな挨拶なんて、できる状態にはなっていないと思うんだー」

side チエルシー

研究室に入るとリア先輩が言っていた事が理解できました。
イ・コージさんはメモや道具に囲まれたまま机に突っ伏して眠って
るんだもん。

「もうイ・コージさん、またベットに寝ないで！。風邪をひいたら
どうするんですかー」

「あつ、もう少しで完成しますのでお待ち下さ……リアさんでした
か、おはようございます」

「もう夢の中でもお仕事をしないで下さいよー。早く顔を洗って来
て下さいー」

お仕事の夢は、僕も見るんだよねー。
大きいコンサートの前とか見ちゃうんだよね。
でもリア先輩は愚痴を言ってるけど、どこか楽しそう。

「チエルシーちゃん驚いたでしょ。イ・コージさんは新しい仕事が入
った日は何時もこうなんだよー」

「なんかイ・コージさんとリア先輩って夫婦みたいですねっ！」

でも羨ましくはない。
だって僕もクリスマス様を起こせる日が来るんだから……でもまだまだ
先の話だから、少しだけ羨ましいかも。

「なっ、なっ、何を言ってるの！。馬鹿な事を言っていないで机を片
づけてっ」

（そんなに慌てなくもいいのに。メモに書いてある爆発×とか硬化×ってなんだろう？）

side イ・コージ

なんでしょう、顔を洗って帰って来たらリアさんが慌てていました。

「イ・コージさん、新しい道具は完成したんですか？僕楽しみで昨日あまり寝れなかったんですよ」

チエルシーさん、期待に応えなくて、心苦しいんですけども

「そんなに簡単にはできませんよ。特に今回は責任が重いんですから」

「えー、つまんないの。メモの爆発×とか硬化×って何ですか？」

「それは採掘に爆発は使わない、作業着に硬化は使わないの意味ですよ」

「爆発魔法は使わないんですか？僕はそれが一番手っ取り早い感じがするんだけどなー」

チエルシーさん、確かに手っ取り早いですよ。
でもね

「確かに最初は魔石に爆発の魔法を付与しようと思いました。でも

やめました、何でか分かりますか？これは実習の一部ですよ」

「お金が掛かるからですか…違いますよね。リア先輩助けて下さいー」

「チエルシーちゃん、きちんと自分で考えなさいー。マジックアイティムは便利だけじゃ駄目なんだからねー」

リアさんはまるでお姉さんみたいな言い方で、チエルシーさんを諭しています。

「もし、爆発を付与した魔石が誤爆したらどうします？死人がでちゃいますよ」

「でも僕は取り扱いをきちんとしてれば問題はないと思います」

「チエルシーさん、クリスさんが誤爆で亡くなっても問題ないって言えますか？」

知らず知らずのうちに言葉がきつくなつたのか、チエルシーさんが黙ってしまいました。

いじめたつもりはないんですけども、気まずいです。

「昔と言ってもほんの少し前までは私も頼まれた依頼をこなせばいいって思ってたんですよ。でも便利な力は危険な力にもなるんです」

偉そうに言ってますけど、私は戦争の片棒を担がされる所だったんですから。

チエルシーさん、おじさんのお説教は愛情の裏返しなんですよ…だからクリスさんにいじめれたとか言わないで下さいね。

「イ・コージさんは開発をして失敗や後悔した事があるんですか？」

「私はデュクセンの生まれなんですけどね……もう2度とデュクセンには戻れないんですよ。あんな後悔は誰にも味わって欲しくないんです」

自分が造った道具が悪用されたり、人に追われて相手を殺めたり、そんな経験は誰にもして欲しくありません。

side リア

イ・コージ

元デュクセン魔法研究所の所員。

ゴブリン操作魔法を悪用される事を恐れ逃亡し、廃城に籠城。

またその時に追っ手を数人を殺害する。

その罪によりイ・コージは討伐され死刑囚となる。

私は最初イ・コージの助手を命じられた時に聞いた話と実際に会った時の印象の違いに戸惑った。

イ・コージ、いやイ・コージさんは愚直なまでに仕事をこなしている。
く。

まるで贖罪をするかの様に。

そして自分の健康を省みない。

私の心配も知らずに。

イ・コージさんは他人の不幸を極端に嫌う。

そして自分が幸せになる事も避けているみたいだ。

最初はイ・コージの魔法能力だけに興味があつたから引き受けた助手の仕事。

私は能力だけじゃなくイ・コージさんの仕事に対する考え方にも興味が出てきて正式に助手に立候補した。
そして今は

「イ・コージさん。私の可愛い後輩をいじめたんですから、きちんと答えを出して下さいねー。でも徹夜は禁止ですからねー」

「リアさん、それじゃ間に合わないんですって。理論が完成したら、きちんと睡眠をとりますから」

年下の部下である私に徹夜仕事を禁じれて慌てふためくイ・コージさんと接している時間が楽しくて仕方がない。

「駄目ですー。理論が完成してもテストだ何だ徹夜するじゃないですかー。私が健康を考えて作ったお料理が意味ないじゃないですかー」

最近、貴方は部下なんだからとか、貴方の方が年下なんだからとか言えずに慌てふためくイ・コージさんが可愛く思える時がある。

おじさんも時には厳しくなり、周りの空気を壊します（後書き）

前書きはリアに人殺しと分かっていて惹かれるのはおかしいんじゃないとか言われそうなので、盗賊や奴隷が普通にいる世界です

イ・コージの天敵現る（前書き）

昨日、毎日更新がついてしまいました。

イ・コージの天敵現る

side イ・コージ

胃が痛いです。

リアさんとチエルシーさんが帰るのと入れ替えて、テガ主任が研究室にやって来ました。

「イ・コージちゃん、実習生は帰っちゃったの？」

「ええ、丁度入れ違いになりましたよ」

まさかテガ主任、チエルシーさんの正体に気付いたんですね。

「まあわざわざ君の研究室を希望する娘なんて、きっと変わり者だろうっからいいけどね。それより実習生からの評価が低ければ君のお給料が下がっちゃう事があるからね」

主任、そんな事を笑顔で言わないで下さい。

「ほ、本当ですか？」

きっとチエルシーさんの私への評価は意固地な嫌な親父ですよ。

「当たり前じゃない。将来のルーンランドを支える魔術師を育成する為の実習生制度なんだから。下手すれば元の小さい研究室に戻っちゃうよ」

もし、チエルシーさんが実習に来なかったらやばいですよね…

初日から実習生に厳しい態度なんてとるもんじゃありませんね。決めました。

明日チエルシーさんが来る事を祈りながら、今日は徹夜仕事をします。

待つ時間って、何でこんなに長いんでしょうね。

「イ・コージさん昨日はきちんと寝ましたかー？」

「リアさんおはようございます。ええきちんと寝ましたよ。ところでチエルシーさんは…」

「おはようございます。今日もよろしくお願いします」

研究室にチエルシーさんの元気な声が響きました。

良かった、きちんと来てくれました。

これでこそ徹夜した甲斐があるってもんです。

リアさん対策にシーツにシワを着けておいたからバレないと思いますし。

「チエルシーさんおはようございます。これを見て下さい。作業着の試作品です」

side チエルシー

イ・コージさんが見せてくれたのは厚手の布服。

「イ・コージさん、これが試作品ですか？」

僕にはどっから見ても変哲のない普通の服にしか見えないんだけど。

「古着屋で買ってきた厚手の服の肘や膝の内側には軟化の魔法を付与して、外側には衝撃吸収、全体に軽量化の魔法を付与しました。まあ見ていて下さい。」

イ・コージさんは自分のティーカップを布の服の中に入れて……上から木の棒で叩いた！！

「イ・コージさん、何をしているんですか」

「大丈夫ですよ。衝撃は布の服が吸収してくれますから、ほらっ」

カップは割れてない所か傷が1つもついてない。

「イ・コージさん凄いです！きっとクリスマス様喜びます。僕がこれをクリスマス様に届けてもいいですか？」

「そんな簡単にはいきませんよ。これはまず研究開発部の第3課にお渡します」

3課？1課や2課は聞いた事があるけど

「3課ですか？3課って、どんなお仕事をしているんですか？」

「3課の人は2課が開発した物を商品に仕上げてくれるんです。耐久性テストや素材、デザインとかの研究をしてくれるんですよ。その後に作成部で量産した後に販売部がクリスマスさんにお渡しします」

うー、クリスマス様が遠のいていく。

side イ・コージ

3課の皆様には毎回助けられていますよ。

私はデザインセンスが皆無ですから、3課を通さないと販売部から苦情がきちゃいます。

「えー残念だなー。せっかくクリスマス様に会えると思ったのに」

チエルシーさんは、よほどガツカリしたのか犬耳と尻尾がうなだれちゃいました。

「仕方ないですね。実習生のチエルシー・ポンに命令です。その服を依頼主のクリスマス・アレクサンドラさんに見せて感想を聞いて来て下さい」

「はいっ！！わかりました」

チエルシーさんはよっぽど嬉しいみたいで、尻尾をパタつかせながら走って行きました。

「喜んで行っちゃいましたね」

「ええ、これでー心おきなくイ・コージさんに確認ができますねー。また徹夜しましたねー！」

「な、何を言ってるんですか？ベットのシーツにちゃんとシワがつ

いてるんじゃないですか」

「目に隈を作って何を言ってるんですかー！わざわざシートにシワまで作って悪戯をした子供じゃないですからー」

私って、リアさんの上司ですよ。

年下の部下にお説教されるっておかしくないですか？

「イ・コージさん、私の話を聞いてますかー！聞いてないですよー。だから徹夜したんですもんねー」

何でしょう、今日のリアさんは迫力満点です。

「いや、つつい研究者の性というか何というか。ほらっ採掘道具の納期もありますし」

「納期なら大丈夫ですよー。どこかの誰かさんが私の心配を無視してー作業着を完成させちゃいましたからねー」

リアさんのご機嫌は、とっても斜めになっています。

でもこのままではいけません。

決めました。

お説教が終わったらイ・コージ特製胃薬を飲みます。

私の胃薬の効果も実感できましたから、次は採掘道具ですね。
一番は安全の確保、次は効率。

.....

本当にどうしましょう。

採掘効率を求めると落盤や水脈を防ぎにくいですし、でもツルハシとかで砕いていたら効率が悪すぎます。

早く何を作るかだけでも決めなきゃ、悩んで答えが出ないまま徹夜をしちゃうっていう地獄の悪循環になっちゃいますから。

そうしたら3課の人が部屋に良く挨拶をしに来ちゃうんですよ、挨拶に形を変えた催促をしにね。

そんな簡単に開発できる訳ないじゃないですか。

試作品でも良いからって言われて試作品を渡すと冷たい視線をくれるんですから。

「イ・コージさん、3課の主任が来ましたよー」
は、早くないですか？

「ああん？イ・コージ……んだコージじゃねえか！すっかり中年太り親父になっただな」

この口の荒さ、傍若無人さ。

「もしかしなくてもエリーゼ先輩？」

勘弁して下さい。

3課の主任がエリーゼ先輩なんて…

エリーゼ・ストロベリー

名前は乙女、中身は男前な身長2mの女傑。
私の学生時代の1個上の先輩なんです。

「おう、今は旦那がいるからエリーゼ・ロックオーガだけだな」

岩の鬼ですか。

エリーゼ先輩その者ですね。

「それはおめでとうございます。旦那様はご愁傷様で…」

後半は小声ですよ。

「コージは結婚したか？……だろうな！そうか、あの布の服を作ったのはお前か。命令だ採掘道具は後3日で作れ。俺の娘のお遊戯発表会があるんだよ」

「3日ですか？！」

無理ですって、言おうとしたんですけども

「先輩への返事は、はいだろっ！」

「はい……」

リアさん、徹夜させて下さい。

イ・コージの天敵現る（後書き）

男前な女先輩 エリーゼ・ロックオーガ

身長2mでショートカットの女傑。

「コージ、パン買って来い」

な人。

おじさんになっても、学生時代の先輩は働いても怖かったりする（前書き）

エーリゼ先輩は女性です。

おじさんになっても、学生時代の先輩は働いても怖かったりする

side イ・コージ

エリーゼ先輩はドワーフの父親とエルフの母親の間に産まれたと聞
いています。

エルフの優れた容姿と高身長、ドワーフの筋肉質な体と質実剛健な
性格、

それを持ち合わせたのがエリーゼ先輩。

年は40才近くの手ですが、エルフの血の所為か、見た目は20歳
ぐらいにしか見えません。

そして自分にも他人にも厳しい方なんです。

3日、3日で開発。

エリーゼ先輩を満足させる物を3日で…

胃だけじゃなく頭まで痛くなってきました。

「エリーゼ主任、いきなり来て納期の短縮なんて横暴過ぎますよー」

リアさん、その人にたてついでいけません。

学生時代は冒険者をしいて、オークを素手で倒した人なんですよ！

「コージ、このピンクもじや誰だ？」

確かにリアさんは、ピンク色の髪をしていて髪がボサボサですけども

「私の助手をしてくれているリア・クローゼさんです」

「助手か……。なら仕事だけの付き合いだろ？ コージは俺の可愛い後輩だ。少なくとも俺はお前よりはコイツの事を分かっている。コージなら3日あれば作れるから言ってるんだよ」

そうですね。

先輩は5分でパンを買って来いって人でしたよ。

「リアさんありがとうございます。候補はありますから大丈夫ですよ。それじゃ作成に入りますので」

正直に言えば先輩から逃げたいだけなんですけどね。でもそうは問屋が卸してくれないみたいです。

「待て。お前はまだ俺に挨拶をしてなかったよな。新入りの後輩が先輩に挨拶をしないと、コージも偉くなったよな」

がっちりと私の肩を掴んで不適に微笑むエリーゼ先輩。

「いやー、先輩がこちらにお勤めとは知りませんでしたし。所長からも余り目立たない様に言われていますので」

「おい、コージ。お前何をやらかした？ デュクセンの魔法研究所にいた筈の奴がルーンランドの魔法研究所にいて所長に目立つなって言われただ？ まさか世間様に顔向けできない事をしたんじゃないやねえーだろな」

正直に話したら、先輩の鉄拳がとんできますよね。言わなくてもとんできそうですけど。

「エリーゼ主任、お待ち下さい。イ・コージさんは私がスカウトしたんですよ」

声をした方を見ると所長が立っていました。

どうやら、リアさんが連れて来てくれたみたいです。

所長が詳しい説明をしてくれて先輩を説得してくれました。

「コージ、死刑囚になってたとはな……。この馬鹿野郎！！何で俺に手紙を寄越さねんだよ！！お前は俺を信用できねえってのか？」

だって、先輩に相談したら全力で解決しようとするじゃないですか。今も涙を流してますし。

涙を拭いもせずに見つめてくるなんて、相変わらず男前な性格ですよね。

「エリーゼ主任がイ・コージさんの知り合いだったとは驚きました。主任この事はどうかご内密にお願いしますよ」

まあ先輩は口が堅いから大丈夫でしょうけど

「所長分かりました。でも1つだけ条件があります。この馬鹿が開発した物は俺に任せて下さい。コージきつちりと再教育してやるから覚悟しとけっ！！それと俺に変な遠慮は無用だ。次になんか隠したら覚悟しとけよ」

私は立場上、他人と接するのを避けたい立場ですし、心を開ける人

が近くにいるのはありがたいですよ。
尊敬する先輩をっかりさせない為にも頑張りますか。

「イ・コージさん大丈夫でしたか？あの馬鹿でかい女は何なんですかー？」

リアさん、馬鹿でかいと言ったら私が鉄拳制裁をくらっちゃいますよ。

「エリーゼ主任は、私の学生時代の先輩ですよ。口が悪くて手もはやい人ですが、面倒見も良いし情にも厚い方です」

「それじゃ徹夜をするんですよー。イ・コージさんは助手じゃなくて先輩の言う事を聞くんですねー」

リアさん、ピンクもじゃて言われた事を根にもってませんか？

「話を聞いたら先輩も仕事が忙しくて中々娘さんと触れ合う機会が少ないみたいですよ。それを聞いたら頑張るしかないじゃないですか」

独身彼女なしとしては家族持ちの人を優先させたいですし。

「へー、そうなんですかー。イ・コージさん……いえコージさん嬉しそうですねー」

「それにあの人は元冒険者なんですよ。素手でオーク倒したりオーガを一刀両断しちゃう人ですから、あまり逆らいたくないんですよ」

「その話は本当ですかー？」

「本当ですよ。昔、無理矢理パーティー組まされていましたから」

まあ、その経験があつたお陰で追っ手とも戦えたんですけどね。

1日目、候補の理論から絞り込み

2日目、試作品の設計図作り

3日目、試作品作り

4日目の朝、やりました。

なんとか形にする事ができたんです。

「おう、コージ出来上がったて本当か？」

「出来ましたよ、出来たから肩をバシバシ叩くのは止めて下さい。私は猿人族の普通のおじさんなんですから」

side エリーゼ

「悪い悪い、つい嬉しくてな。でどんな物を作ったんだよ」

「全く、先輩は力加減を知らないんですから。これですよ」

コージが見せたのは、魔石を珠に加工した物が1つと三角柱に加工してある物が四組。

大きさは珠が手の平大で三角柱は60?ぐらいの長さがあった。

「こいつにはどんな魔法が付与してあるんだ？」

「珠には高温・冷却・振動を付与しています。三角柱には増幅結界の魔法を付与しました」

「つまり岩盤の真ん中に穴を開けて珠を四隅には三角柱を仕込む。それで高温と冷却で岩盤を脆くして振動で砕く仕組みか。増幅結界は力を逃がさない為と落盤防止って所だろ？」

持つべきは使える後輩だよな。

「流石ですね。耐久性と回収方法に問題がありますけども」

「そこからは3課の仕事だよ。とりあえず三角柱の背中に吸着の魔法を付与してやるよ。おーし、他の所でつまっている案件もお前に任すからな！」

「先輩、勘弁して下さいよー」

「遠慮すんなって。そうだ、うちの課の女を紹介してやろうか。どーせ1人だと口説けねーだろ？」

コージをからかって遊んでいると、助手のリアが扉を力一杯開けて

出て来た。

「コージさん話が終わったら研究室に戻りますよ」

「リアさん耳を引っ張ったら痛いですって。先輩失礼します」

いーねー。

いじり甲斐がある奴を、もう1人みつける事ができた。

おじさんになっても、学生時代の先輩は働いても怖かったりする（後書き）

パソコン投稿に変えたい今日この頃。
理由は活動報告を見てください

身に覚えのない疑いはきつい(前書き)

マジックガールズの2人目が登場します

身に覚えのない疑いはきつい

side エリーゼ

俺の部屋にコージの助手が訪ねて来た。

「よお、ピンクもじゃ。何のようだ？」

「ピンクもじゃって言わないで下さいー。私の名前はリア・クローゼです。……コージさんって昔から人を避けていたんですかー？」

ピンクもじゃは、可愛いもんで、俺がコージと呼び捨てにするもんだから、呼び方をイ・コージさんからコージさんに変えやがった。

「あいつは昔からクソまじめで、他人と話すより勉強や研究に時間を割いていたからな。まともに話をしていたのは、高校と大学を通じて俺の他は4、5人ぐらいじゃないか」

「そ、その中には女性の方はいたんですかー？いえコージさん、女性が苦手なみたいですから」

「女か？1人だけいたな。名前は忘れたけども、妙にあいつに懐いてるのがいたぜ。まっ男としてじゃなく兄弟みたいな感じだったけどな」

「コージさん、そんな話してくれた事ないですよー」

「誰でも話したくない事があるんだよ」

あんな事になりや思い出したくもないだろうさ

side イ・コージ

通常業務へと戻ったある日の事。

「イ・コージさん、明日メンバーのキャロルが見学に来たいって言うてるんですけども良いでしょうか？」

ええっと……

（リアさん、キャロルさんって誰でしたっけ？）

（キャロル・リーチエ、今のマジックガールズのメンバーで猿人族の娘ですよー）

「えーと、そのキャロルさんも実習希望ですか？それなら新しいバングルが必要になりますよね」

「すみません、僕もまだ詳しくは聞いてないんですけども。イ・コージさんの話をしたらどうしても会ってみたいって」

「頼みたい依頼でもあるんですかね？」

それ以外はないと思いますし。

次の日

「イ・コージさんおはようございます。さっキャロル入って」

チエルシーさんに促されて入ってきたの大人しそうな顔をした黒髪でロングヘアーの女の子、あれの娘がキャロル・リーチエさんなんですね。

でもリーチエさんは私を見て涙ぐんでいます。そんな怖い顔をしていないと思うんですが…

「パパだ……パパ、キャロルずっと会いたかったんだよ」

パパ？ここにいる男性は私だけですよね？

えっ？

なんでリーチエさんは私に抱きついて泣いてるんですか？

「あのリーチエさん、おじさんをからかうのは止しましょうよ」

リアさんから不機嫌オーラが噴出されていますし。

「パパはキャロルの事を分らないの？」

「私は結婚していませんし、第一娘なんていませんよ」

く、空気が重いです。

それにリアさんやチエルシーさんの目線が冷た過ぎます。

「ここはコージさんの過去を知っている人に聞くのが一番ですよね
ー」

私の過去を知っている人って……
エリーゼ先輩が来たら私が弱るだけですよ

イ・コージです。

ただ今自分の研究室で正座をさせられて尋問を受けている最中です。

「それでキャロルだっけ。お前何歳なんだ？」

「こ、今年で１７才です」

リーチェさんは、先輩の迫力に怯えています。

「１７か…ならコージが２０歳の時か。コージお前２０の時に身に覚えはないのか？」

「それは先輩も知ってるじゃないですか？私はあの頃も良くて友達、恋人は無理って言われてたじゃないですか」

「だよな。んでキャロルはなんでコージが父親だと思ったんだ？」

「髪の色と絵姿です。ママが大事にしていた絵姿にパパ…イ・コージさんが写っていて私と同じ黒髪はイ・コージさんだけでしたから。私のママは若い時にデュクセンの魔法大学に留学していましたから」

ルーンランドから来た留学生で私と一緒に絵姿に写っている女性と
言えば…嫌な予感がします。

「確かに魔法大学には俺もコージも在学していたけどな。コージは

モテなかったからな。母親の名前は何て言っんだ」

「母の名前はマリーです。マリー・リーチェです」

当たりました。

リーチェさんが私の娘だった方がどれだけ気楽だったでしょうね。

（先輩、やばいですよ。

多分リーチェさん父親が分かったんですけども、まずいです）

（コージ、父親って誰なんだよ）

（リーチェさんの父親はアレキスですよ。アレキス・アポロードだと思います）

（マジか？確かにそれはまずいな）

（所長に報告しますか？場合によってはリーチェさんは保護対象にしないと）

「コージさん、こそそと何を話してるんですかー？男ならきちんと責任をとらないと駄目ですよー」

リアさんの目もまずい事になっています。

「リーチェさん、お母さんはご健在ですか？」

「いえ、3年前に亡くなりました。亡くなる時に何かあったらデユクセンにいるイ・コージっていう人を頼りなさいって言いました。」

だからてつきりイ・コージさんが私のパパだと思ったんですけど違うんですよ……」

マリー、とんでもない贈り物をしてくれましたね。

身に覚えのない疑いはきつい（後書き）

女性キャラは増えるけどハーレムになる要素がゼロです

イ・コージの恋の思い出（前書き）

重い話になります

イ・コージの恋の思い出

ルーンランド魔法研究所 所長室

side ヤ・ツレ

イ・コージさんとエリーゼ主任が血相を変えて私の部屋に来ました。

「それでキャロル・リーチェの父親は誰なんですか？」

「アレキス・アポードロという男でデュクセンの魔法大学で私と同じ研究室にいました」

「ふむ、それに何か問題があるんですか？」

「アレキスはレクレールの生まれなんだよ。しかも親は司祭って話だ」

……

たしかにまずいですね。

レクレールは清光の精霊レクーを崇める宗教国家。

国民の名前、仕事、結婚をレクーの神託で決めている国。

つまりマリイ・ルーチェがアレキス・アポードロの子供を身ごもったと言う事実はレクーの神託を無視した事になります。

ましてやレクレールでは他国者との結婚を忌み嫌い、他宗教者との結婚は重罪となる国。

「マリイ・リーチェはよく無事でしたね」

「妊娠が分かった時点でルーンランドに帰国しましたから」

もし、マリーがそのままデュクセンに、とどまっていたのなら妊娠をなかつた事にする為に母娘共にレクレールの異端者審判隊に殺されてしまったね。

「イ・コージさんとマリー・リーチェはどのような関係だったんですか？」

ただの先輩に我が子を託す筈がありませんから

「マリーの母親と私の母親が従姉妹だったんですよ……。それだけです」

side エリーゼ

ただの親戚ね。

あれがなきやコージも、もう少しまともな人生を送っていたらうに。コージはマリーに惚れていた。

あいつは頑なに否定していたが態度を見たら丸分かりだった、マリーもコージの事を慕っていたし。

大学の誰もがコージとマリーが付き合うものと思っていたんだよね。でもコージの親友だったアレキスとマリーは出会った途端にお互いが惹かれていった。

それを見てあの馬鹿は、新しい理論を見つけたとか言っただけで研究に没頭し始めた、まるでアレキスとマリーを避けるかの様に。

アレキスとマリーも気まづかったらしく、2人とコージの距離は日に日に離れていった。

そんなある日、突然にアレキスとマリーは大学を辞めてそれぞれ自

分の国に帰郷した。

コージはアレキスから詳細を聞いたらしいが、誰にも何も言わずに、それからますます人を避ける様になったんだよな。

そりゃそうだろうな、自分の親友に惚れていた女を横取りされた挙げ句に妊娠の相談をされたんだからな。

しかもそれが自分の命を危険に晒しかねないものなんだから。

side イ・コージ

忘れたつもりだったんですけども、あの時の惨めな気持ちが蘇ってきました。

笑い合う親友と片思いの女性、それをただ眺めるしかできない自分を下げてマリーの妊娠を伝えてきたアレキス。

私に何も言わずにルーンランドに帰ったマリー！。

思わず溜め息が出てしまいます。

「コージさん、溜め息をつくとか幸せが逃げちゃうんですよ。私に逃げる幸せなんてありませんから、なんて言わないで下さいねー」

「すいません、ちょっと昔の事を思い出してしまいました」

「キャロルの御両親の事ですかー？」

リアさんは、最近鋭いんですね。

「まあ、その様なものです。チエルシーさんとリーチェさんはどうしました？」

「お仕事に行きましたー。キャロル落ち込んでいましたよー」

それは不幸中の幸いですね。

リーチェさんに詳細を訪ねられたら困りますから。

「コージさんはキャロルの父親じゃないんですよねー」

リアさんまだ、疑っているんですか？

「違いますよ。遠い親戚にはなりますけどね」

「詳しい事は教えてくれないんですよねー？」

「興味本意で聞く様な話じゃありませんよ。できたらリーチェさんにも話したくないですし」

理由はどうあれ、父親のアレキスがリーチェ母娘を捨てたんですから。

「興味本意じゃなかったら良いんですかー？」

「もう少し待って下さい。所長から指示がきますので」

異端者審問隊がリーチェさんを今でも警戒してなきやいいんですけどね。

翌日

来ないで欲しいって期待していたんですけどね。

リーチェさんが来ちゃいました。

まあ父親の手掛かりが欲しいのは分かるんですけどね。

「リーチェさん、誰にも見つかりませんでしたか？」

「イ・コージさん、大丈夫だよ。キャロルは僕がきちんと変装させたからさ。あつキャロルもこの研究室で実習したいんだって」

長期戦を展開するつもりなんですな。

「それじゃリーチェさんのバングルも作りますね。好きなお花とかあります？」

「パパ……イ・コージさんは、母が好きだった花を覚えていますか？その花にして下さい」

なんとも落ち込みそうな課題です。

「リアさん、徹夜するのは……」

「却下ですよー。私はコージさんの過去より、今の健康に関心がありますからねー」

マリーが好きだった花ですか…

どっちの花なんですかね。

アレキスの好きだった花バラとマリーが好きで私が贈った花スズラン。

どっちなんですかね。

イ・コージの恋の思い出（後書き）

なんか、やるせない話になりました

イ・コージの昔語り（前書き）

イ・コージの昔が少しです

イ・コージの昔語り

side イ・コージ

結局、どっちの花にするか決める事ができないまま朝を迎えてしまいました。

そのまま通常業務にはいったんですけども、リーチェさんがチラチラと私を見ってきます。

テガ主任なら喜んでしょうけども、今の私にはプレッシャーにかなりせん。

雑念を振り払って、業務に集中しようとしたその時です。

「クリス様だ、クリス様の匂いがする。僕に会いに来てくれたのかな？リア先輩、僕の髪型おかしくないですか？」

チエルシーさんの尻尾の動きが激しくなっています。

でも流石は犬人族ですね。

姿が見えなくても匂いだけで人を特定できるんですから……

クリスさんは絶対に浮気はできないですね。

クリスさんの姿は見えなくても近づいて来るのがわかるらしくチエルシーさんの尻尾の動きは時間と共に激しさをましています。

「イ・コージさん、失礼します。なんかチエルシーがお世話になっているみたいであります。これ、よろしかったらみなさんで食べて下さい」

流石はクリスさん、手土産も持参しましたか。

「クリスマスさん、気を使わなくても……」

「クリスマス様、クリスマス様、僕に会いに来てくれたんですか？僕お勉強頑張っているんですよ！」

チエルシーさんの我慢も限界になったみたいで、尻尾の動きをMAXにしながらクリスマスさんにベツタリとくつついてます。

「チエルシーに会いたかったのも本当だけど、ヤ・ツーレさんから呼び出されたんだよ……緊急事態ってイ・コージさん、何があったんですか？」

「全員揃ったみたいだな。用件はそこにいるキャロル・リーチエに関係する事だよ。詳しい説明は所長室でするそうだ。お前等移動するぞ」

全員揃ったから先輩に連絡したんですけどね。
先輩は、相変わらず有無を言わせない人です。
リーチエさんは…不安そうです。

「それでは皆様に集まってもらったのは、私の研究室に新しく実習生として来てくれましたキャロル・リーチエさんの父親に関する事です。名前はアレキス・アポロード、出身は精霊公国レクレールです。アレキスは司祭の息子でした」

「イ・コージさん、レクレールの司祭の息子さんが何でデユクセン

にいるんですか？確かあの国は留学生制度は禁止な筈ですよ」

流石はクリスさん、国際情勢にお詳しい。

「禁止と言うより廃止になったんですよ。留学先で恋人を作ったり…子供を設けるケースが後をたちませんでしたから。表向きは異宗教に触れさせない為ですけどね」

私を気遣ってか、先輩がレクレールの宗旨やアレキスとマリーの関係を話してくれました。

でも何でしょう。

私に集まる同情の視線は？

「今一番の問題は、私とリーチェさんが接触した事をレクレールの異端者審問隊に知られたかどうかです。昔似たようなケースで脅迫や暴行…殺人もありましたから」

「レクレールの留学生制度が廃止になったのは、そんな理由があったんですか」

「今まで全部がレクーの思召しで育った純粹培養な奴等だったかな。厳しい戒律から解放されて恋心に歯止めが効かなくなったんだろ」

純粹ですか。

確かにアレキスも純粹なレクレール信者でしたね。

純粹故に人を裏切れたんでしょう。

そんな中リーチェさんが重い口を開きました。

「父は何故、私とママを捨てたんですか？」

「リーチェさんのお母さんとリーチェさんを守る為だって、アレキスは言っていましたよ」

もう18年もたったんです、あの日から。

「アレキスお久しぶりですね。でも私は研究が忙しいんですね」

正直に言えばアレキスを見るとマリーを思い出すから会いたくなかったんですね。

正確に言えばアレキスと幸せそうにしているマリーを見たくなかったんです。

「コージ君、こんな事を君に頼むのは厚かましいのは百も承知だ。事情により僕は帰らなくちゃいけない。だからマリーの事を頼む」アレキスはそう言うのと土下座をしてきたんですね。

「貴男の留学期間はまだあるじゃないですか。第一マリーが納得しないでしょ？お断りさせてもらいます」

「マリーのお腹には僕の子供がいるんだ。このままじゃ異端者審問隊に全員殺されてしまうんだよ。だから…」

「だから何です？それを覚悟で付き合っただんじやないんですか？マリーと一緒にバルドー辺りに逃げて親子3人で幸せに暮らせばいいじゃないですか」

あの時は私もかなりイラついていました。

「無理です。僕もマリーも学生なんだよ、生活をしていけない……」

「とにかくマリーときちゃんと話をして下さい。お金なら少しはお祝いとして差し上げますから」

それから数日してマリーとアレキスは帰郷。

私に残されたのはマリーからの”お兄ちゃんごめんなさい”と書かれた手紙だけでした。

……

なんですか、このシンとした空気は。

私が話したくもない過去を語ったのに。

「コージの昔話より、現在の話をしなきゃな。所長の話だと異端者審問隊の影はないみたいだが安心はできねえ」

「そうですね。チエルシーは家に来ないか、チエルシーが前に使っていた部屋もあるし、将来的には住むんだしさ」

「い、いいんですか！それなら僕クリスマス様のメイドを一生懸命頑張らせてもらいます！！」

「リアさんは、しばらく研究所に住み込みますか？確か宿泊室が空いてる筈ですし」

「分かりましたー。コージさんが徹夜しない様に監視をしますから覚悟して下さいねー」

「リアさん夜更かしは体に毒ですよ。それじゃ先輩はどうしますか？」

「娘は旦那の実家に預かってもらっさ。それでリーチェはどうするんだ？お前もチエルシーと一緒にクリスの厄介になればいいんじゃないのか？」

「私は、私はパパの研究室に泊まります。ママの昔話も聞きたいですし」

リーチェさん、私はパパじゃないんですけど

イ・コージの昔語り（後書き）

マジックガールズの残り3人どうしょ

イ・コージの決意（前書き）

今回は話が重めな気が

イ・コージの決意

side チェルシー

（クリス様、なんかリア先輩が怖いです）

キャロルのお泊まり発言を聞いたリア先輩から不機嫌オーラが噴出しているんだもん。

「キャローラー？コージさんは貴女のお父さんじゃないんだからー、パパは止めなさいー！それと泊まるんなら私と一緒に宿泊室に泊まりなさい」

「嫌！パパはパパなんです」

（チェルシー、なんでリーチェさんはイ・コージさんをまだパパだって言うのかな？）

（キャロルは昔から絵姿のイ・コージさんをパパだと思っていたんですよ。キャロルの中ではイ・コージさんがパパになっちゃってるんです。

でも何でキャロルのお母さんは本当の事を教えなかったのかな？）

（それは簡単だよ。もしアレキスさんの事を教えたりしたらどうなると思う？）

（そっかー！キャロルがアレキスさんを訪ねて行ったら危ない目にあっちゃいますよね）

（どっちにしろイ・コージさんが損な役回りだよね）

血が微妙に繋がっている娘ができたんだもんね。

しかも元親友と片思いしていた人の娘だから複雑だよ。

「キャロル、コージさんに迷惑をかけないのー」

「リアさんには関係ないじゃないですか！」

「私はコージさんの助手ですー。研究の邪魔は認めれませんー。第一キャロルとコージさんは赤の他人でしょー」

（ねえ、チエルシー。リーチェさんに家族はいるの？）

（クリス様確かいない筈ですよ

（それじゃイ・コージさんがリーチェさんの唯一の肉親になるんじゃないのかな）

「えっ！クリス様本当ですか？そうなるとイ・コージさんとキャロルは家族になっちゃうんですか！」

「チエルシーちゃん何を言ってるのかしらー？遠い親戚が家族になる訳ありません」

リア先輩、目が怖いです。

「あは、あははっ。クリス様帰りましょ。僕久しぶりにクリス様が大好きなお料理作りたいです」

イ・コージさん、ご免なさい。
僕とクリス様は帰ります。

side イ・コージ

「リアさん、そろそろ宿泊室に行かれたらよろしいんじゃないでしょうか？リーチェさんも宿泊室に行かなきゃ駄目ですよ」

「ほら、キャロル行きましょー。コージさんの研究の邪魔はしちゃ駄目ですー」

リーチェさんは渋々リアさんと一緒に宿泊室に行ってくれました。もしリーチェさんが私の研究室に泊まったのがバレたら主任を始めファンの人達に殺されちゃいます。

それにこんな研究は、あの娘達には見せられませんからね。異端者審問隊が襲って来た時の為に必要なんですけど。

「よお、コージ。悪い顔をして何を作ってたんだ？」

「先輩帰ったんじゃないかったんですか？」

「ああん？お前はこんな夜中に乙女に1人で帰ってたのか？」

乙女？リアさん達は宿泊室に行きましたけど…

「先輩ならどんな相手でも返り討ちにできると思いますけども」

危なかったです、もう少し遅れていたら先輩の鉄拳制裁を喰らう所でした。

「俺ならな。それに戦いをするなら前衛が必要だろ？魔術師1人で戦うなんざ無謀だぜ？」

「リアさん達は誤魔化せたんですけどね。流石に先輩は騙せませんでしたか」

先輩は家族持ちだから巻き込みたくないんですけど。

「あの中でお前の悪い顔が分かるのは俺だけだからな。俺は早く片づけて家族の水入らず時間を味わいたいんだよ」

でも先輩を巻き込む訳にはいきません。

ここは気体魔法で寝てもらいましょう。

腕のブレスレットに手を掛けようとした瞬間

「おいこらっ！コージぶざけた真似をすると腕をへし折るぞ！」

「ちよつ、先輩。関節が極まってます、痛いですって！本気で折れますから」

勘弁して下さい！

先輩はドワーフ譲りの馬鹿力なんですから。

「へー、これが噂の気体魔法に使う魔石か。…何で1カ所穴があいてるんだ？」

「そこには新しい魔法を付与した魔石を付与するんですよ。…を埋めます」

side エリーゼ

「へー流石は元死刑囚。考える事があくどいな」

「先輩、違いますよ」

コージの奴は何時になく真剣な表情になった。

「んだよ。あくどいなんて冗談に決まってるだろ」

「私は元じゃなく今も死刑囚ですよ。脱獄しただけで罪は消えた訳じゃありませんから」

「だから1人で行くのか？」

「私は異端者審問隊を釣り上げるには、うってつけの餌ですからね。それにあいつ等がいなければアレキスもマリーも幸せに暮らせたんです」

「お前に何かあったらピンクもじゃが泣くぞ」

コージは気負いもせずになんと立ち上がった。

「リアさんの優しさに甘えて深く関わり過ぎました。だから私のくだらない過去に彼女を彼女達を巻き込む訳にはいかないんです」

「だよ。ピンクもじゃ行かせていいのか？」

side イ・コージ

へっ？

「コージさん。貴男ってー人は、どうしてーそうなんですかー？」

「リアさん、宿泊室に行ったんじゃないんですか？」

「エリーゼ主任が教えてくれましたー」 コージはまた一人で背負い込むつりだ”ってー」

「いやだって、巻き込む訳にはいかないですし」

「コージさんも巻き込まれたんじゃないですかー。スープを煮ておきますから絶対に帰って来てください」

「おらっ、コージ。久しぶりに暴れに行くぞ」

ありがたいんですけども、私恥ずかしくないですか？

イ・コージの決意（後書き）

イ・コージの中で人気あるキャラとかいるんだろっか？

イ・コージと異端者審問隊（前書き）

久しぶりに裏イ・コージがです

イ・コージと異端者審問隊

side イ・コージ

（コージ、どうやら喰らいついたみたいだぜ）

先輩の言う通り、不自然な殺気を身にまとった人達が4人程、私達の後を着けて来ています。

でも街中で頭までローブですっぱりと覆っていたら怪しくて仕方ないんですけど。

（先輩、路地裏に誘導しますか？多分2人が前衛職、1人は魔術師、1人はヒーラーかと）

（あの格好じゃ前衛職の意味がねえーだろ。俺は時間稼ぎをすればいいんだよね？）

（はい。出来たら前衛を吹き飛ばして全員を一カ所にまとめてくれたら助かります）

（まったく。相変わらず注文が多いんだよ）

普通は人が入らない路地裏にまで男達は着いて来ました。

私達が振り返ると同時に男達は武器が構えました、前衛はダガーと手斧です。

私達を襲った後に川にでも捨てるつもりなんでしょう。

「レクー様の意志に背く異端者よ。天罰を喰らうがよい！」

レクーの意志だから、自分は罪を背負わなくて良いって事ですか。

（先輩、前衛2人の武器には毒が塗られている筈です。気をつけて下さい）

「んなもの掠らせなきゃいいだけだろっ！」

先輩が使う武器は、仕込み槍。

槍と言っても太さは私の腕位あって普通の猿人族に持つ事もできない重さなんですけどね。

相手はダガーと手斧、先輩は槍。

そして動きにくいローブを着た戦いの素人と元冒険者。

こんな言い方をするのは、いけないかも知れませんが前衛の人達に同情をします。

だって、先輩の一薙ぎで吹き飛ばされた前衛の人は気絶しちゃたんですから。

気絶してる姿が昔の自分と重なって、ちょっとだけ泣きそうになりました。

「おら、コージ。まとめてやったぞ」

私は新しくブレスレットに埋め込んだ白い魔石に手を掛けます。

真っ白な気体に包まれた男達は深い深い眠りへと墜ちていきました。

「イ・コージが貴方達に新しい記憶を授けます。キャロル・リーチエは父親をイ・コージと信じ込んでおり危険はありません。またイ・コージも片思いしていたマリー・リーチエの面影を宿すキャロルに懷かれて昔話をしたくない様です。」

キャロル・リーチエはルーンランドの人気アイドル、わざわざ毛を吹いて傷を探すのは愚。これ以上深く関わるのはレクー様のご威光を汚すだけ、後は素早くレクレールに戻り報告をするだけ…」

私は先輩に目で合図をして、その場を後にしました。

「コージ、殺らなくて良かったのか？あいつ等に恨みがあつたんだろ？」

「異端者審問隊が死んだらレクレールに怪しまれますよ。そうしたら、あの連中は私達の関係者を無差別に襲いかねません。それに殺したら利用できませんからね」

「ったく、やっぱりお前はあくどいよ。ほら可愛い助手が心配しているだろうから帰りな」

「リアさんも律儀ですよ。仕事先の上司を心配して夜中に起きるなんて」

「はあー。こりゃピンクもじゃ苦勞するな」

先輩、その深い溜め息なんですか？

「私は有給もきちんと認めますし、残業をお願いした事も殆どないですよ」

「はい、はい。俺は家に帰るから、コージはピンクもじゃスープを飲みに早く研究所に帰れ」

先輩は背中を向けて、手を振りながら闇に姿を消していきました。

研究室の前に来たんですけども、なんか開けにくいんですね。

リアさんが宿泊室に行ってくれていたら、ありがたいんですけども。

「コージさん、自分の研究室なんだから、サツサツと入って下さい！全く遊んで遅くなった子供じゃないんですから」

リアさんって確か助手ですよね。

最近、私より立場が強くなっている気がするんですけど。

「パパ大丈夫だった？私、心配したんだからね」

リーチェさん、パパなんて呼ばれると既婚者だって勘違いされちゃうんですよ。

別に勘違いされて困る人もいないんですけどね。

「リーチェさん安心して下さい。全て解決しましたから明日からはお家に戻れますよ」

.....

「記憶を書き換える魔法ですかー？それって他の人にバレたら不味いんじゃないですかー？」

「書き換えると言っても条件がありますからね。周りに記憶を呼び起こす物がない事・他の記憶と密接に関連していない事・記憶を得て短時間である事等です。それにこれは私にしか使えませんし」

リーチェさんが、私に会った記憶を消すのは無理でしょうね。

「ふーん、まずスープを飲みますかー。それとコージさん、こんな危ない事は二度としないで下さいね」

「大丈夫ですって、それでも元冒険者なんですよ？」

「元ですよー。徹夜とか不養生で不健康になってる元冒険者じゃー説得力がありませんー」

「そうだよパパ。パパには元気でいてもらわないと、私また1人になっちゃうんだよ」

私は貴女達の危険を回避したのにお説教ですか？

「リーチェさんは親戚の叔父さんにパパは駄目ですよ」

違うパパと勘違いされちゃいますよ。

「やだ、パパはパパ。それに私がコージ叔父さんと呼んでいたら異端者審問隊の記憶が戻っちゃうでしょ？それに私の名前はキャラルだよ！」

「それならキャラルさんって呼びますね」

「自分の娘にさん付けはおかしいよ。キャラルだよ」

「コージさんー。私が何を言いたいか分かりますよねー?」

「リアさん…じゃなくリアとキャロル改めてよろしくお願いします」

どうして私の周りは気が強い女性ばかりなんでしょうね。

イ・コージと異端者審問隊（後書き）

マジックガールズの残り3人どうしよう。

話が長くなったらだすかもしれません。

イ・コージシリーズのキャラ一覧とか見たい人はいますか？

素材を扱うという事（前書き）

毎日更新を続けるか悩み中。

素材を扱うという事

side イ・コージ

ここ私の研究室ですよね…

リア・チエルシーさん・キャロルの3人がファッションの話をして盛り上がっているんですけど、何を話しているかが、全く分かりません。

そろそろお仕事を再開しませんかの一言を言うタイミングが掴めずにいた時、ノックも無しにドアが開きました。

「イ・コージちゃん、お願いがあるんだけど。魔石の原料を発注し忘れたから採集して来てちょうだい。これに詳しい事が書いてあるから。それじゃーね」

テガ主任は依頼書を置くと同時に姿を消しました。

主任、久しぶりに研究室に来たのに、自分のミスを尻拭いさせるつもりですか。

「パパ、何あれ？パパに物を頼むのにあんな言い方をするなんて！」

キャロル、一応は私の上司なんですから、あれって言うのは止めて下さい。

「僕ああいう人大っ嫌い！」

主任はチエルシーさんやキャロルの事を大好きなんですけどね。

「嫌味ネズミって役にたっているんですかねー？」

リアさん、誰かに聞かれたどうするんですか？

「嫌味ネズミね。ピンクもじゃも、上手い事を言うじゃねえか！コージ、テガから引き継ぎを受けたか？」

「先輩おはようございます。これから内容を確認する所ですよ。先輩が来たって事は3課も関係しているんですか？」

「ああ、2課からサンプルが中々来ないから催促に行ったらテガの奴がコージをお願いしましたって言い訳をしたからよ」

正確には材料調達の段階から丸投げをしてきたんですけどね。

「エリーゼさん、なんでアレのミスでパパにしわ寄せがくるんですか？あれが主任なんですか？」

「へー、キャロルは随分とコージの肩を持つな。テガは役に立つてるよ。成功しそうな開発を嗅ぎ分ける能力と才能を持った新人を見つけたす能力に関しては天下一品だぜ。俺だけじゃなく3課の他の主任や営業の連中もテガの動きには注目をしているからな」

早い話がテガ主任は2課の才能を見つける為の目印なんですな。漁の時に鳥山を探すみたいなものですか。

「先輩、あまり聞きたくないんですけど開発の猶予期間はどれ位残っているんですか？」

「俺も鬼じゃねえ。3日待ってやる」

流石はエリーゼ・ロックオーガ、名前も言う事も鬼ですよ。

「エリーゼ主任、あんまりですよー。内容も知らない開発を3日でやれなんて酷過ぎますー」

「あんなピンクもじゃ、俺は内容を分かっているから3日って言うたんだよ。コージなら1日もあれば十分な依頼なんだよ」

先輩は私の能力を把握しきっているからきついんですよ。

確かに依頼内容を見る限り1日あれば充分なんですけども

「先輩、魔石はどうしますか？採集を頼める冒険者を紹介してくれるんですか？」

「パパ、なんで冒険者さんが必要になるの？」

なんかパパって呼ばれ方に慣れてきている自分がいます。

「普通は研究所にある材料を使うんですが鮮度が重要な物や特殊な素材は冒険者に依頼をして採集して来てもらうんですよ」

「はいはい！僕からの質問。鮮度が必要な物って何があるんですか？」

チエルシーさん、研究室には5人しかいなんですから、そんなに元気良く手を挙げなくてもいいのでは。

「例えば花の中にはしおれたら効能が薄くなる物がありますし、水も腐ったら力を失います。魔物の目や血液も鮮度が重要なんですよ」

「へー、でもパパも元冒険者さんなんだよね？」

キャロル、それは止めて下さい。

「コージ、可愛い娘が期待してるぞ。これは父親として格好良い所を見せてやらないとな。…さあ久しぶりに採集クエストと洒落込むか！！」

そんな事を言いますが、先輩は暴れただけじゃないですか。

「天然石の採集ですか…この近くで採集できる場所があるんですか？」

「ああ、近くの岩山で天然石が採れるぞ。出没する魔物もオークやトロルみたいな安全な奴ばかりだしな」

それは先輩だから言える言葉なんですよ。

「今回必要な天然石はアメジストですか。キャロル・チエルシーさん、魔石の作り方は分かってますか？」

結構、基本的な事ですよ。

「えーとキャロル、わかる？」

チエルシーさん、実習を厳しくしますよ。

「パパ、石に魔力を注ぎ込むんだっけ？」

キャロル、微妙に惜しいです。

「磨きあげた天然石、所謂パワーストーンにその石に合わせた魔力を染み込ませて魔力変化をさせたのが魔石です。例えばアメジストは浄化の力をもったパワーストーンですから浄化の魔法陣の上に置いて力を付与していきます」

「パパそれ3日で出来るの？」

キャロル、いい所に目を付けましたね。

「今回は時間がないので私が魔力を浴びせていきます。……多分、徹夜に近くなりますけどね」

とりあえずアメジストを採りに行きます。

「なんでリアやキャロル達も着いて来ているんですか」

「私はコージさんの助手ですから」

採集に助手は必要ないですよって、言ったら反論が凄いでしょうね。

「パパの冒険者姿も見てみたいし、これも大事な実習なんですよ？」

キャロルに何かあったらマリーに顔向けができないんですけど。

「僕はとうとう、その他扱いなんですか！」

チエルシーさん、すいません。

「ところで皆さんは魔物との戦闘経験は…ないですよね」

「コージ丁度いいじゃないか。これも大事な実習だよ」

確かに私達が何気なく使っている材料の採集がどれだけ危険なのかわかるのも大事ですよね。

イ・コージの体験学習

side イ・コージ

膝が痛いです。

日頃の運動不足の所為か、それとも増えた体重の所為なのか、長距離の徒歩の結果、私の膝が泣いています。
目的地の岩山に着く頃には私の膝は号泣していました。

「さて、これからアメジストの採集を行います。岩山の中腹にアメジストの坑道があるので、そこで採集を行います。私とエリーゼ主任が護衛役、リアが監視係です」

立場上、顔には出していませんが、かなり辛いです。

私の膝は中腹まで保ってくれるんでしょうか？

みんなに隙があれば疲労回復の魔術を使いたいですけどね。

「パパ、勝手に鉱山で採集をして怒られないの？」

キャロル、あまりパパ・パパ言われるとただでさえ縁遠い私の婚期が遙か彼方に消えちゃんですけど。

……遙か彼方にでも、婚期があればの話なんですけどね。

「この坑道の周辺には魔物が多く出没する様になって今は廃坑状態なんですよ。何匹か魔物を倒せばアメジストを持ち帰るのを黙認してくれるんです」

「あのー僕あまり魔物さんに会った事ないんですけども、どんな魔物さんが出没するんですか？」

「この岩山にでるのはオーク、トロルたまにスピアゴートが出るそうです」

「スピアゴートってどんな魔物なんですかー？」

リアさんが、知らなくても不思議はないです。

スピアゴートは人気のない岩山に住んでいて冒険者ぐらいしか見る事がない魔物ですから。

「そのまんまだよ槍みたいな角を持った山羊さ。草食動物だけど気が荒くて下手な冒険者なら串刺しにされちまうんだよ。あいつの角は鋭いから加工すれば最高の槍が出来るんだぜ」

先輩が舌なめずりしそうな表情で説明をしてくれています。

つまりスピアゴートが出るかもしれないから、ここの岩山を選んだんですね。

「パパ、トロルやオークも素材になるの？」

「トロルはたまに骨を呪術の素材に使う人がいるくらいですね。オークの毛皮は防具の他に緩衝材として利用しますし、牙に魔法陣を彫り込めば立派なマジックアイテムになります」

トロルですか。

人語を話すトロルなんて誰も信じないでしょうね。

「今回の目的はあくまでもアメジストです。無理に魔物を討伐する必要はないですから安心して下さい。岩山に登る前に休憩しますか」

幸いな事に誰も反対せずに休憩となりました。

見つからない様に膝を治癒していたらリアが話し掛けてきました。

「コージさんは魔物と戦うのは怖くないんですかー？」

「魔物にしてみれば人間の方が怖いと思いますよ。自分達の住処にいきなり攻めて来て醜いとか、力が強いとか、倒すと金になるとかで魔物を滅ぼすんですからね。……魔物より人間の方が怖いですよ」

私と一緒にすよね。

容姿が醜いと忌み嫌われ、魔力が高いと同僚から敬遠され、創る物が金になると上司にはめられた…デクセンでの私は、まるで魔物ですね。

「こおーらーコージ！なに黄昏れてんだよ、過去より現在だろ。つたく今お前には可愛い娘に心配してくれる助手、優しくて綺麗な先輩、その他の実習生がいるじゃねーか」

先輩が元気づけるように私の背中を叩いてくれました。

「先輩ありがとうございます、そうですね現在を大事にしなきゃいけませんね」

「やつぱり僕はその他なんですか？僕アイドルなんですよー」

「チエルシーしょうがないじゃない。パパはアイドルに興味がないんだから」

「キャラルまで！リア先輩は違いますよね？僕をその他扱いにしませんよね」

不思議ですよ。

ルーンランドでは、私が一番苦手としていた綺麗な少女達と笑い合っているんですから。

（約1名は違い…やめましょう。この思考は確実に私の寿命を縮めます）

「さてそれじゃ行きますか。ここからはおふざけは無いですよ。1人の油断が全員の命を危険に晒す事を忘れないで下さい」

side キャロル

その言葉と同時にパパの雰囲気が変わった。

普段はニコニコして気の弱そうなパパだけでも、今のパパは戦闘態勢にはいった魔術師になっていた。

エリーゼ主任もパパも体の力は抜いているみたいだけど、辺りを警戒している。

目的地の坑道まで残り半分ぐらいとなった時、パパとエリーゼ主任の表情が険しくなった。

「コージ…来たぞ」

「ええ、オークですね。前方にオークがいます。私が結界を張りますから皆さんは、その中で見ていて下さい」

パパが結界を張り終わると同時にオークが現れた。

学校の授業でオークの事は習ったけども、実際に本物を見ると怖い。丸太の様に太い腕、槍の様に尖った牙、赤く血走った目。

「キャロル、僕恐いよ」

何時も元気なチェルシーも震えている。

「大丈夫、パパとエリーゼ主任が守ってくれるから」

前にパパが教えてくれた魔力が高いだけじゃ強い魔術師にはなれない。

敵と相對しても怯えずに仲間に何の魔法を付与して、敵の属性を見極めて適した魔法を放つ冷静さがなくちゃいけないって。

最初に動いたのはパパ、オークにパライズを掛けて麻痺をさせた。すかさずエリーゼ主任がオークの心臓を一突きにする。

「あーあ、穴を開けたら毛皮の価値が下がるじゃないですか！せっかく麻痺させたのに」

「相変わらず細かいな。今はオークの毛皮は在庫があるからいいんだよ。それよりキャロル、チェルシーこっちに來てオークの牙をとれ」

え？えー！！

無理、無理だつて。

だって、あのオークはまだ胸から血を流してるんだよ！

パパに助けを求めても

「これも実習です。私達が使っている道具が何を犠牲にして出来ているか、体感して下さい」

そう言うとパパは懐からナイフを取り出して私に渡した。

「そのナイフは魔物の解体用に切れ味を鋭くしてあります。それでオークの牙を切り落として下さい」

パパ、オークの目が私を睨んでるよー。

鶏やブタさんの解体は見た事はあるけれど、自分で手を掛けるのは初めてなのに。

何とかオークから牙を取ったらパパが頭を優しく撫でてくれた。

「忘れないで下さい。私達の便利な生活は何かの犠牲の上に成り立っています。それから目を逸らさないで下さいね」

パパの手は大きくて暖かくて、小さい頃から夢にまで見ていた父親という初めて存在を感じる事ができたんだ。

イ・コージの体験学習（後書き）

なんかキャラルとエリーゼ先輩に他のキャラが押し負けている気がします。

採集編はまだ続きます。

イ・コージキャラクター一覧（前書き）

足して欲しいキャラや項目は随時受け付けていきます。
見る人がいたらですけど

イ・コージキャラクター一覧

イ・コージキャラクター一覧

イ・コージ

ルーンランド研究所研究開発部第2課所属
年 38歳

独身彼女なし

見た目 中年太り・黒髪短髪・黒縁眼鏡のおじさん

元はデュクセンの魔法研究所で働いていたがある事件を起こして死刑囚になる。ヤ・ツーレの手助けで脱獄。人付き合いは苦手だったがルーンランドに来てからは巻き込まれて友人・知人・娘？まで増えた。

リア・クローゼ

イ・コージの助手

年 20

見た目 ピンク色の髪を無造作にまとめ分厚い眼鏡をかけている。

エリーゼ曰くピンクもじゃ イ・コージの不摂生に呆れて最近は世話女房と化している

間延びした話し方が特徴。眼鏡を外すと美人。

「コージさん、もう少し健康に気を使って下さい」

ヤ・ツーレ

ルーンランド研究所所長

年 40

痩せこけた体に薄い髪は悲哀を感じさせるも、それも権謀術数の材料としてしまう強かな人

「イ・コージさん、後始末は私がしますので、あの人達を片づけて下さい」

テガラ・パークリ

研究開発第二課主任

年 35

出世は他人の禪が基本。

既婚者だけど若い娘が大好き。マジックガールズの大ファン。

「イ・コージちゃん、後は任せたからねっ」

エリーゼ・ロックオーガ

研究開発第三課主任

年 39歳

既婚者で子持ち。

イ・コージの学生時代の先輩。

ドワーフとエルフのハーフで2mを超える身長と怪力の持ち主。

イ・コージが全く頭が上がらない存在でもある。

イ・コージの事は不器用な弟の様に思っている。

「コージ、3日で作れ。お前なら徹夜すれば間に合う」

元冒険者で結婚前の名前はエリーゼ・ストロベリー

クリス・アレキサンドラ

アレキサンドラ子爵の嫡子

年 25

見た目は残念だけでも能力や性格は良い。

人を生まれや地位で判断しない為に助けてもらったイ・コージの事を尊敬している。

「イ・コージさん、助かりました」

チエルシー・ポン

マジックガールズの犬人族

年 17

元はクリスに仕えていたメイドで、クリスを慕いまくっている。

一人称は僕、黒髪ショートカットの元氣娘。

「イ・コージさん、僕はその他なんですか？」

キャロル・リーチエ

マジックガールズの猿人族

年 17

イ・コージとは遠縁にあたるも、絵姿に写っていたイ・コージを子供の頃から父親と信じていた為に今もパパと呼んでいる。

長い黒髪の正統派美少女

「パパ、ずっと元気でいてね」

ザギン・シース

マジックガールズのマネージャー

年 42

マジックガールズは事務所のドル箱だから仕事を沢山させたいお人。

「キャロルちゃん、この後のターウも頑張ってね」

イ・コージキャラクター一覧（後書き）

この中の誰かを功才と絡ませたい

探掘実習と戦闘実習

side イ・コージ

オークの後は魔物と出会う事もなく、無事に目的の坑道へ辿り着く事ができました。

「ここだな、コージ先頭を頼むぞ。何しろお前以外はか弱い乙女しかないんだからな」

先輩に言いたい事は沢山ありますが突っ込んだら負けならぬ、突っ込んだら鉄拳制裁が待っています。

「分かりましたよ。皆さん私の後に付いてきて下さい」

荷物からランタンを取り出して中へ向かいます。

「パパ、ランタンに火をつけないの？」

「このランタンの中に入っている魔石は、太陽の力があると言われるペリドットに光の魔法を付与したものです。だから魔力を流してあげると」

side キャロル

パパの言葉と同時にランタンの中の石が光って、坑道の中が明るく照らされた。

「凄い明るい！！これもパパが作ったの？」

「坑道で火を着けたら酸欠になるかもしれませんがね。幸いにこ
こは採掘がされていますから有毒ガスの心配はないですから。ほら
余所見をしているとアメジストの鉱脈を見落としますよ。皆さんに
1つずつお渡しますから気を付けて歩いて下さい」

坑道の中はデコボコしていてパパのランタンが無かったら転んでい
たと思う。

ジメジメして気持ち悪いけども、頑張ってアメジストを見つけてパ
パに誉めてもらった。

「キャロル、見つかりそう？僕の自慢の鼻でも石の臭いは嗅ぎ分
けられないから不安だよ」

自慢の鼻が効かない所為か、チエルシーは少し不安気。

「この辺りのアメジストはもう採掘されているんだと思うよ。ゆっ
くり探しながら進んで行こ」

side イ・コージ

（おい、コージ。教え子達にアメジストの見つけ方を教えなくても
いいのか？）

確かに目だけで探していたら時間が掛かりますからね。

（それも実習ですよ。アメジストを見つけて採掘して運んで加工を
するまでが今回の実習ですから）

（かー、意地が悪いねー。そんなんじゃ娘に嫌われちゃうぞ）

（だからキャロルは親戚の娘ですって。嫌われても経験を積んで欲しいですからね。まあ念の為に私も採掘しておきますよ）

（親戚でも義娘でも実習が終わるまでにお前の気持ちを決めておきな。あの娘は本気でコージの事を父親として慕っているみたいだぜ）

（キャロルの父親はアレキスですよ）

（キャロルにしてみれば顔も分からない自分と母親を捨てた男より、昔から父親と信じていた優しいお前の方が父親だと思えるんだろうな）

（しかし、ですね）

（それにアレキスは異端者審問隊が俺達を襲うのを止めていないんだぜ？つまり下手すりゃキャロルも殺されていたんだぜ？どっちにしろお前が唯一の身内なんだから、あまり他人行儀なのは悲しませるだけぜ）

（だから呼び捨てにしてるじゃないです）

私にしてみれば凄い決断なんですよ

（どこの世界に娘に敬語を使う父親がいるんだよ。それにピンクもじゃも同じたぜ？お前1回色街に行って女慣れをして来い）

（先輩、女性が何を言ってるんですか？）

色街なんて冗談じゃありません。

（冗談だよ。つうか、いい年こいたオッサンの癖して色街って言葉だけで面を赤くするなよ）

「コージさん、色街って何の話ですかー？今は実習中ですよー！」

「リア誤解ですって、もう先輩が変な事を言うから誤解されたじゃないですか」

「ピンクもじゃ、安心しろ。コージに色街で遊ぶ度胸なんざねえからよ」

何でしょう、最近女性陣になめれっぱなしな気がするんですけど。

「リア、キャロルとチェルシーさんは見つける事ができますかね」

もう何回もアメジストを見落としているんですよ。

「コージさん話題を変えましたねー…ヒント位教えてあげてもいいんじゃないですかー？」

ヒントですか。

「キャロル、チェルシーさん、周りを見ているだけじゃ中々見つかりませんよ。アメジストは又の名を紫水晶、つまり水の魔力を多く持っているんですよ」

「パパー、分かり辛いよ。具体的に教えてよー」

キャロル、少しは考えましようよ。

「具体的ですか…目で見えないならどうしたら良いかを考えて下さい。こんな風に」

目を瞑って辺りの魔力を感じる。

大地の魔力が充満している坑道にある水の魔力、その中でも浄化の力が強い物を探していく。

…ありました。

次はアメジストを結界で囲んでさらにその周りの岩も結界で囲む。

「大気よ、槌へと姿を変えて、それを砕け…エアハンマー」

空気が衝撃波へと姿を変えてアメジストの周りの岩を砕いていきます。

壁に開いた穴の中にはドーム状の岩だけが残りました。

「あれがアメジストのドームと呼ばれている物です。さあ同じ要領でアメジストを探してみして下さい。取り出し方はお2人にお任せしますよ」

「パパの意地悪ー。アメジストを見つけていても二重結界とかエアハンマーとかは私達には無理だよー」

「まずはアメジストを見つけて下さい。採掘方法は道具を使ってもいいですし魔法を使っても構いませんから」

道具でコツコツと掘った為に時間は掛かりましたが2人共無事に、アメジストを見つける事が出来ました。

「さてアメジストに軽量化の魔法を付与しておきますから各自採集した物は自分で持って下さい」

行きも帰りも私が先頭ですか。

いえ、私が先頭で良かったんです。
入り口で待ち伏せされていました。

「皆さん、坑道に戻って下さい。スピアゴートが待ち伏せをしていました」

大切な義娘、大切な先輩、大切な助手、大切な実習生。
命を懸けてでも守ってみせます。

スピアゴートは2m近い体長に1mの鋭い角を持つ山羊から進化した魔物です。

「へー、いい角を持ってやがんな。コージ間違っても角は折るなよ」

「先輩、坑道に戻ってキャロル達を守って下さいよ」

「お前が俺に命令をするな。それに魔術師1人だと命懸けでも相打ちが関の山だろ？」

やっぱり、先輩には、ばれてましたか。

「命掛けて、コージさん貴方って人はー！」

「パパ、私達も戦うよ。初級魔法くらいなら唱えられるから。牽制には使えると思うよ」

「もう、キャロル僕を含めないでよー。イ・コージさん戦闘実習の評価は高いんですよね」

ありがたいですね。

私なんかを見捨てないばかりか、一緒に戦ってくれるんですから。

side エリーゼ

「コージ、これだけ手駒がいれば楽勝だろ？お前の采配に期待してんぜ」

コージの冒険者としての強さは高い魔力でも、豊富な魔術でもない。仲間の能力をフル活用した戦術を考えれる指揮能力なんだよな。

side イ・コージ

「キャロル、チエルシーさん得意魔法で牽制をお願いします」

キャロルがウォーターボール、チエルシーさんがウインドウを放ちましたがスピアゴートは、殆どダメージを受けていません。

「リア、私の合図にあわせてスピアゴートにスタンを掛けて下さい」

キャロルとチエルシーさんが時間を稼いでくれているお陰で長い詠唱を唱える事ができます。

「岩殻の精霊よ、我は汝と契約を結びしイ・コージなり。我との盟約を今果たしたまえ。地を割り岩を槍へと変えて我が敵を貫け。アースジャベリン…リアお願いします」

side リア

私のスタンでバランスを崩したスピアゴートは大地の槍に体を貫かれました。

あれが魔術師コージの実力なんですね！。
そしてその魔術師は…

「まったく、魔力を使い過ぎて気絶しやがって。コージは肝心な所で抜けてるんだよな」

触媒も用意せずに魔力を使い過ぎた為に、気絶をしてしまいエリゼ主任に負ぶってもらいながら岩山を降りる羽目になりました。

探掘実習と戦闘実習（後書き）

そのうちに同僚の男性キャラも出したいです。
感想指摘お待ちしております

新しい依頼はストレスの予感（前書き）

なんとか今日の更新に間に合った。

待っている人がいなくても一日一更新を目指します

新しい依頼はストレスの予感

side イ・コージ

気がつくとは私は何故かベットに寝ていました。

近くに人の気配を感じたので、薄目を開けて確認をすると怒りを露わにしているリアがいました。

寝返りをするふりをして反対側を見たら涙目のキャロルがいます。

えーとこれはどんな状況なんでしょうか？

確かアメジストを取りに坑道に行つてスピアゴートと遭遇したんですよね。

……あー私、魔力を使い過ぎて気絶しちゃったんでしょうね。

今一番の問題は、何時目を開けるかと言う事。

正直言つてリアとキャロルの反応が怖いんです。

「コージさん、目が覚めたんですよねー？ まったくー私達がどれだけ心配をしたか分かつているんですかー！！」

いや、リア私はあまり若い娘に心配された経験がないんで実感ができないんですけど。

「パパ、どうしてあんな無茶をしたの？ パパは娘を悲しませて楽しいの？」

キャロル、まだ会つて何日もたつてないんですよ？

そんな事言つたら号泣しそうですよね。

でも私はこの研究室の室長でリアは助手、キャロルに至つては実習生なんですよ。

私の方が立場は上な筈ですよーね。

「なんかご心配を掛けたみたいで申し訳ありません。ただの魔力切れなんで心配ありませんよ」

でも体の疲れからすると、ただの魔力切れじゃなくて

「ただの魔力切れー？お医者さんの診断だと体力も著しく消耗しているそうですよー？なんで魔力切れで体力も消耗しているんですかー？」

頑張れ、イ・コージ。

リアとキャロルなら何とか誤魔化せる筈です。

「ピンクもじゃ、そりやその馬鹿が魔力で足りない分を生命力でまかしたからだよ。コージ、どこの世界に触媒も使わずに中級精霊魔術を使う奴がいるんだよ」

先輩、タイミングよく現れすぎです。

「やっぱりあれは精霊魔術だったんですねー？コージさんが精霊魔術を使えるなんて初めて知りましたよー。どうせただの助手の私には内緒だったたんですよねー」

「リア違いますよ。精霊魔術を使えるのがバレると軍属にされやすいんです」

「でも良くお前にそんな金があったな。精霊魔術を覚えるのに必要な金の金が必要な筈だぜ？」

「あれは5年ローンで覚える事ができました。でも結構、使い辛い

魔術なんですよ。場所は岩地に限定されますし、大地系の魔石を触媒にしないと魔力切れをおこっちゃうんですよ」

使い勝手の良い精霊魔術何て一般所員には手がだせまん。

「それなら何でパパは、あの時使ったの？」

「私はあの実習の責任者ですよ。実習生のキャロル、チエルシーさん、助手のリア、同行者のエリーゼ主任の安全は私の責任です。皆さんに何かあったら、皆さんのご家族、友人、恋人に申し訳がたちません」

それが大人のお仕事なんですから。

ここです、この流れのまま持って行けば誤魔化せる筈です。

「さて、それじゃアメジストの加工を行いますか」

私がベットから立ち上がった瞬間

「コージ心配するな。加工なら俺がしといてやったから、お前はそこでゆっくりと助手と義娘からお説教を受けるんだな。それとお前の運び賃はスピアゴートの角を槍に加工する事で手を打ってやるから感謝しな」

先手を打たれましたか。

「良かったですねーコージさん、言い訳や反省をする時間が出来ましたよー」

リア、笑顔が怖いんですけど

「パーパー、昔はともかく今はパパに何かあったら悲しむ人がいるって事を知って欲しいな」

キャロル、泣くのは反則です。

私は最近涙もろくなっているんですから。

結果、2時間程、交互にお説教してくれました。

魔力は精神力が影響しますから、かなりきつかったです。

数日後

久しぶりに所長室に呼び出されました。

この間の実習がばれたんでしょうか。

所長室にいたのは所長とマジックガールズのマネージャーのザギン・シースーさんでした。これは確定ですよね。

でも

「これはこれはイ・コージさんー。うちのチエルシーとキャロルが、とてもお世話になってるそうで、本当に感謝ですよっ」

えーと、どうしたんでしょうか？

「ザギンさんはマジックガールズのメンバー2人と親しいイ・コージさんに依頼があるそうなんです」

いや、親しいって言ってもチエルシーさんはリア任せですし、キャロルは親しいと言うか親扱いですもんね。

「あの依頼とは、どんな内容なんでしょうか？」

「ソニア知ってます？マジックガールズの猫人族のソ・ニ・ア」

「お名前は聞いた事がありますが、どうされましたか？」

「最近、しつこいファンがいて困ってるんですよ。ストーカーって奴です。とりあえずソニアを紹介しますね、ソニア入って」

ソニアさんは肩くらいまでの長さの赤い髪で、気が強そうな感じがします。

「マネージャー、これがイ・コージって魔術師？やだ、キモいおっさんじゃん」

えーと、自覚はあるんですけど初対面で言います？

新しい依頼はストレスの予感（後書き）

ソニア、どんなキャラにしよう

イ・コージは心配性（前書き）

クリスマスって事でイ・コージも更新
まあイブに読んでくれる人は少ないでしょうけども

イ・コージは心配性

side イ・コージ

えーと、私は依頼を頼まれたんですね。

「ちょっと何見てんのよ。やだ、この親父キモい！」

ソニアさんは私を汚物でも見る様な目で見ています。
モチベーションが下がりますね。

「ソニアちゃん、イ・コージさんがキモいストーカーを退治してくれるんだから我慢してね」

ザギンさんはソニアさん宿める様に猫なで声で話しかけています。
私の我慢は無視なんですか。

「イヤだ！もつと若くてイケメンじゃなきゃ嫌」

ソニアさんは、ブイツと横を見て取り付くしまもない感じです。

（猫人族はプライドが高いですからね、その上ソニアさんは人気アイドルですから、ああなる訳です）

「マネージャー、こんなキモいオッサンじゃなく騎士団にお願いして。こないだのイケメン騎士様がガードしてくれるって言ったじゃん」

騎士ですか、禄な事にならないと思います。

「でも鎧を着て剣を持った騎士がいたらファンの人が怯えて近づかなくなると思うしー、騎士様は貴族様だから難しいと思うよ」

ザギンさん、正確にはファンの人は面倒に巻き込まれなくて近づかないし、ここの騎士は暇だから大丈夫かと

「それなら騎士団にガードをお願いしてはいかでしょうか。それとイ・コージさんはソニアさんの件には関わりませんのでご安心下さい」

懇願にも聞こえる所長の言葉を聞いて得意満面になるソニアさん。忠告はできないんですけども、貴女は既に所長にはめられていると思いますよ。

「パパお帰り！疲れた顔をしてどうしたの？」

最初は戸惑いましたが、キャロルの素直な笑顔は私を癒してくれます。

.....

「あー、ソニアは自分が気に入った相手じゃなきゃ冷たいんだよねー。パパごめんなさい」

「キャロルが謝る事じゃありませんよ、それに全部当たっている事です。ただあの騎士団が役に立つかどうかが心配なんですよ」

役立つとしても、田んぼのカカシとドッコイドッコイですからね、まだ害がない分カカシの方がマシかもしれませんけど。

「でもパパ一応は騎士様なんでしょ？相手も警戒するんじゃないかな」

「ソニアさん接近し過ぎて騎士がファンの人達に逆恨みされなければ良いんですけどね。キャロルやチエルシーさんはストーカーの被害に遭っていませんか？」

「私とチエルシーはパパが作ってくれたバングルのお陰で後を着けたことはないよ。でも控え室から物が無くなった事はあったんだ」

ちなみにキャロルのバングルは答えを出さないまま魔石だけを埋めたシンプルな物になりました。

「後を着けられたのなら、どんな相手かわかっているんですか？」

「ソニアが見たのは小太りな男らしいよ」

だから私に嫌悪感を露わにしたんですか。

でも…ちよつと気になりますね。

「それでキャロルが盗られたの物ですか？お金とかじゃなくて？」

「食べかけのパンとかタオルとかが無くなった事があるよ。でもソニアのついでって感じ」

ゆ、許せません。

私の可愛い義娘キャロルの物を盗むとは、パパは絶対に犯人を許し

ません。

「キャラルのバンクルを改造します。私が離れていても安心できるくらいに改造をしますから」

可愛い義娘にストーカー被害が及ばない様にバングルにフル改造を施します。

「イ・コージさん僕のバングルも改造してく下さいよー」

キャラルの依頼料は…ザギンさんに請求しておきますか。

「リア、今日のお仕事は夜に片づけます。先にバングルの改造に取り組ますから」

……

出来ました。

決して普段の仕事は手抜きな訳じゃないですけども、気合いが違います。

「パパ新しくどんな魔法をつけてくれたの？」

「まず指定した物に小範囲の結界を張る事ができるようになりました。これで物を盗られる心配がありません」

「掃除や緊急に持ち出す必要がある時はどうするんですかー？」

「リアご心配なく指定した人以外は結界に触れる事ができません。」

つまり予め指定をしておけば大丈夫なんです」

「それと何かあった時に緊急通報が出来る用にしました、キャロルは私にチエルシーさんはクリスマスさんに連絡がいきます。後私やクリスさんが入れない場所があるかもしれませんから、リアにも連絡が入ります、さらに夜道でも安心できる様に光の魔法を付与してあります」

キャロルとチエルシーさんは安心したのかバングルを持って仕事に行きました。

「あんな機能をつけるなんてコージさんは人が悪いですね。犯人探しでもするつもりなんですかー？それに教えてない機能もありたよねー」

「リアにはバレましたか。私はその関係でクリスマスさんに会いに行っています」

こんな時に保険はいくらでも必要ですから

イ・コージは心配性（後書き）

新キャラの名前を考えなきゃ、男性キャラがでます

イ・コージの予想（前書き）

3時間くらいで書いたので、内容はあれかと。
繋ぎの話ですし

イ・コージの予想

side イ・コージ

今日は自分の意志で所長室に来ました。

「所長、すいません。ソニアさんのガードをする騎士の名前を知りたいんですが」

「騎士の名前はキーザン・ナルシーですよ。私の予想もイ・コージさんと一緒です。確証が得れたら報告をお願いしますよ。騎士団との交渉は私にお任せ下さい」

クリス邸

「キーザン・ナルシーさんですか？ナルシー子爵の次男で騎士団に所属している筈ですよ。彼がどうかしましたか？」

「マジックガールズのソニアさんにストーカー騒動がありましたね。キーザンさんがガードにつく事になったそうです」

クリスさんならこの違和感に気付く筈です。

「それはおかしくないですか？騎士団は王様の直属なんですよ、個人が依頼をだせる筈がありません」

私は所長から聞いた事のあらましをクリスさんに伝えました。

「ソニアさんがストーカーに追われた時に偶然にキーザンさんに助けられて偶然今まで見た事がなかったストーカーと思われる小太りの男性を見かけたそうです。怯えるソニアさんに対してキーザンさんがガードを申し込んだそうですよ」

確か”美しい子猫ちゃんを守るのは騎士の勤め。是非、僕に貴女を守らせて下さい”でしたっけ。

「偶然ですか、随分と都合良く重なった偶然ですよ」

誰に都合が良いのかは分かり易すぎですよ。

「はい、でも今の所はまだ偶然ですけどもね。クリスさんはキーザンさんと知己なんですか？」

まさか、お友達な訳はないと思いますが。

「同じ子爵家ですからね。お城での行事で何回か顔はあわせています。僕と違って美男子ですよ」

クリスさんが人を評価する時は、その人の長所で評価します。

つまりキーザンさんは顔は優れているけれども、他の部分を正確に評価すると気まずい事になるんですね。

……キモいおじさんのひがみじゃないですよ。

「そうですか。何かあった時にはアレキサンドラ家が後盾になって欲しいのですがお願いしてよろしいでしょうか？」

私1人で子爵家の次男と対立が出来る訳ないですから。

「むしろ僕からお願いしたいくらいですよ。チエルシーに被害が及ばない様にお願ひします」

「その点は大丈夫ですよ。キャロルとチエルシーさんのバングルをフル改造しましたから。あつそれとこの貝を渡しておきますね。この貝はチエルシーさんからの緊急連絡がはいる仕組みになっていますから」

「イ・コージさんは、チエルシーよりもキャロルさんが心配なんですよ？チエルシーがボヤいていましたよ、”イ・コージさんが親馬鹿になってキャロルばかり可愛がる”って」

私が親馬鹿ですか…正解です！！

「キャロルは私なんかを本当の父親の様に慕ってくれますからね。つい情が湧いちゃいまして、でも実習の成績は公平に評価をしますよ」

そんな事したらリアにお説教されちゃいますし。

「パパ聞いて！！昨日から私達のガードに来た騎士がすごいのっす」

キャロルは研究室に来るなり挨拶も、そこそこに不満を爆発させています。

「でも不思議なんだよね。不満に思っているのは僕達2人だけだし、ソニアに至っては素敵な騎士様扱いなんだから」

キャロルとチエルシーさんだけが不満を持ったと言う事は私の考えは正しかったみたいですね。

「ありえないよね。いくら格好良くてもさ、”高貴で美しい私に恐れをなして醜いストーカーは恥て退散する事でしょう”何て言うんだよ。信じられない」

私も一回くらいは美しいとか言ってみたい気がします。

多分、熱の心配をされるんでしょうけども。

「あれでクリス様と同じ子爵家の息子なんだよ。クリス様が一生懸命にお仕事をしている時間にお茶を飲みながらガードをなんて恥ずかしくないのかな？」

そりやお茶を飲んでいても平気でしょうから。

「それは大変でしたね。…キャロルちよつと良いですか？」

side キャロル

パパに呼ばれたのは研究室にある休憩室。

「ここ数日のうちに私が見に行っても不審に思われないキャロルのお仕事はないですか？」

もしかして憧れの父兄参観？。

「うーんとね、明後日に握手会があるよ。本当は参加券が必要なんだけどもパパには私がプレゼントしてあげる」

「ありがとうございます。その握手会にはソニアさんも参加しますか？」

「私じゃなくてソニア目当てなのって、腹がたったけれども、パパの説明を聞いて納得できた。」

でもパパはちよつと過保護すぎると思う。

私のバングルの性能は貴族の持ち物でもおかしくないぐらいなんだから。

side イ・コージ

握手会の会場に着きましたけども、私絶対に浮いてますよ。

私の服装はダンスパーティー用に買った一張羅の茶色のローブです。ほらっ、私を知らないマジックガールズの方もいますからキャロルの立場を考えると清潔な服が望ましいですし。

でも周りの方々は名前の書いたハッピを着て、頭にはハチマキを巻いています。

マジックガールズの名前を書いたハッピもあれば、キャロルは僕の嫁？

…絶対に認めません。

キャロルが欲しければ私との魔力勝負に勝つのが条件ですよ。

それより、お目当ての人物を探さなくては。

イ・コージの予想（後書き）

オリジナルキャラをもつ1人作らないと。
予定では大晦日、元旦も更新です。
今日、明日で書きためをしなくては

傭兵隊の若者とエリーゼ傍若無人？（前書き）

エリーゼ先輩の旦那さんが出てきます

傭兵隊の若者とエリーゼ傍若無人？

side イ・コージ

キーザンさんが、どこにいるか探していると

「やっぱりイ・コージさんも来ましたか」

私を見つけたクリスさんが話し掛けてきてくれました。

「クリスさん！良かった、キーザンさんが見つけれなかったんですよ」

クリスさんもハチマキやハッピを着ておらず周りから浮いています。

「キーザンさんなら、あそこにいますよ」

クリスさんが指さした先は所謂、関係者席。

関係者席で優雅にお茶を飲んでいるフルアーマーの男性、あれがキーザン・ナルシーさんですか。

キーザンは金髪に青い目で女性と見紛う程に整った顔をしています。でもなんでしょう。あの無駄に装飾された鎧は握手会にフルアーマーは必要ないでしょ？

「あの方ですか。でもあんな長い髪だと何をするにしても邪魔でしょうね」

フルアーマーを着るにも邪魔になりますし、鍛錬をするにも邪魔になると思うんですが。

「あまり鍛錬はしないでしょーし、鎧は従者が着せてくれるんでしょーね。おっとそろそろ僕等も並びましょーか。チエルシーとキャロルさんが気にし始めたみたいですから」

えっ？キャロルと握手ですか？

確かにこのまま握手をしないで帰ったら怪しまれますよ。

チエルシーさんとの握手の為に長蛇の列に並ぶのは勘弁ですし、ソニアさんに至ってはキモい扱いからストーカーの犯人にされそうですよね。

他のお2人の列に並んだのがバレたらキャロルがご機嫌斜めになるかもしれません。

でもパパは義娘をヨコシマな目で見ている人がいたらかなり本気なファイヤーボールを唱えちゃいそーなんですよ。

キャロルの列に並びながらも周囲を観察していたら不思議な少年がいました。

年は17、8くらいで、見た目はジャガイモみたいなお顔にイガグリ頭、目は糸目で素朴を絵に描いた感じです。

不思議と言っるのは腰の運びや雰囲気から察して、中々の手練れだと思える事。

しかも、その子は列に並ぼうともせずにソニアさんの列に並んでいる人間を、それとなく観察をしています。

「ボーッとされてどうしたんですか？手をだして下さい」

キャロルに言われて気づきましたけど、いつの間にか私の番がきていたようです。

慌てて手を差し出すと、キャロルが爪をたてて握手をしてきました。あー、私にお仕事を頑張っている姿を見せたかったんでしょうね。

若干、かわいい義娘はご機嫌斜めです。

ちなみにチエルシーさんはクリスさんと握手をした時に、他の人の数倍のこぼれんばかりの笑顔を見せていました。

ヒイキはいけないと思うんですけどね。

キャロルと握手を終えた私は会場の隅に移動します。

これだけ離れていたらキーザンさん探っても怪しまれない筈。

キーザンさんはまるで辺りを警戒していません。

小太りな人がソニアさんと握手をしてもお構いなしです。

そして彼が指にはめている派手な指輪に付与されている魔法は多分……。

「すみません！イ・コージ様ですか！オラはジミー・カッペーという者です！」

ビックリしました、いきなり私に大声で話しかけてきたのはさっきの素朴な少年です。

「そうですけども、私に何かご用でしょうか？」

小太りなおじさんだからストーカーかと疑いました？

「いえ、イ・コージさんの事は隊長の奥様から良くお話を聞いていたので挨拶をと思えます」

「えと、隊長の奥様とは誰でしょうか？」

「オラはルーンランド傭兵隊に入っているんだす。隊長の名前はガドイン・ロツクオーガだす」

ロツクオーガ？

「もしかして奥様ってエリーゼ主任ですか？」

「はいっ！オラは良く奥様にも稽古をつけてもらっています」

物凄く納得です。

あの先輩の旦那さんが勤まるなら傭兵隊の隊長ぐらい勤まりますよね。

「あれイ・コージさんとカッペーさん？珍しい組み合わせですね」

「ク、クリス様オラなんかにさん付けなんて勿体ないですよ」

カッペーさんそんな恐縮しなくても…

まあクリスさんは子爵家の人だし年上だから分かりますけども。

「クリスさんはカッペーさんとお知り合いなんですか？」

「ええ傭兵隊には護衛を頼む事があるので。彼の腕はロックオーガ伯爵のお墨付きですし」

ロックオーガ伯爵？

「ええっ？エリーゼ先輩は伯爵夫人なんですか？」

どっちかというと伯爵夫人じゃなく傍若無人じゃないですか。

「そっついえばイ・コージさんはエリーゼ伯爵夫人ともお知り合いですもんね」

異端者審問隊の一件の時はクリスさんもエリーゼ先輩もいましたね。

「ええ、エリーゼ傍若無人じゃなくエリーゼ伯爵夫人は学生時代の先輩ですから。まさか先輩が伯爵夫人だとは知りませんでした」

「なんでも伯爵も若い頃は冒険者をしていて、その時に奥様と知り合ったそうですよ」

「隊長は身分に拘らず優しく接してくれるお人柄の上に優れた武人なんです。オラの憧れ方なんです」

ついでに女性のガサツさにも拘らないんでしょうね。

とりあえず私はマジックガールズのグッズを買って帰りますか。もちろん、キャロルオンリーですけど。

次の日

「よお、コージ。昨日はマジックガールズの握手会に行ったんだって？お前も親馬鹿だな」

「これはエリーゼ傍若無人じゃなく伯爵夫人。ちょっと気になる事がありました…ギャフツ」

久しぶりに先輩の鉄拳制裁を喰らいました。

「ああんっ！誰か傍若無人だっ。後は伯爵夫人だからって態度を変えたら殴るぞ」

もう殴ったじゃないです？

だから傍若…止めときましよう。

「それで気になる事って何なんだよ？」

………

「ストーカーね。それでカツペーの奴、握手会に行ったのか。ったくあの馬鹿が。おいっコージ、今から俺の旦那の所に行くから知っている事を洗いざらい喋れよ」

――

いや、てつきり先輩の旦那さんだからゴツツい人かと思ったんですけども、ガドイン・ロックオーガ伯爵はクールな二枚目でした。短く刈られた銀髪に引き締まった体、切れ長の目。伯爵よりも傭兵隊の隊長がしっくりときます。

「よお、お前がイ・コージか。女房から良く話は聞いているぜ」

「ガドイン、カツペーの奴がマジックガールズの握手会に行っていたそうだけ。コージ詳しく話せ」

………

「ストーカー騒動にキーザンのガード、魔法が付与された指輪か…。騎士団のガキはよっぽどお仕置きされたいらしいな」

「しかし、まだ予想の域はでていません。ところでカツペーさんが

マジックガールズを応援するとまずいんですか」

なんでもカッペーさんとソニアさんはルーンランドの同じ田舎村の生まれで所謂幼馴染みらしいのですが、ソニアさんは田舎生まれを隠す為にカッペーさんに二度と近づくなと言ったそうです。

ふむ、おじさんがまた一肌脱ごうじゃありませんか。

傭兵隊の若者とエリーゼ傍若無人？（後書き）

さあ今日のうちに書きためを作ります

イ・コージ親娘の暗躍（前書き）

イ・コージに出てくる女性キャラって好き嫌いが別れるみたいです

イ・コージ親娘の暗躍

Side イ・コージ

「ええー！エリーゼ主任って伯爵夫人様なの！！パパ嘘でしょ？」

「キャロル、冗談の様な本当の話なんですよ。ロックオーガ伯爵が旦那様だそうですよ、ちなみなロックオーガ伯爵は傭兵隊の隊長も兼ねているそうです」

キャロル、そんなに驚かなくても…まあ驚きますよね。

「でもでも伯爵夫人様が研究所で働いていて大丈夫なの？伯爵夫人様って言ったら紅茶を飲みながらオホホと笑い合っているようなんだけど」

先輩が紅茶を飲んでオホホですか…笑いならとれますよ。

「研究所で働く人間が一族の中にと貴族の中でも鼻が高いらしくお舅さんお姑さんも絶賛奨励中だそうですよ。それにあの先輩に紅茶を飲みながらオホホなんて無理ですよ」

「傭兵隊の隊長さんと研究所の主任さんが、確かに凄い夫婦だよね。同じ貴族でも騎士団とは大違いだね」

「その騎士団絡みなんですけど、キャロルはソニアさんの幼馴染みが傭兵隊にいるのを知ってましたか？」

「うん、カップー君でしょ？ソニアは口では、もう来ないでとか言

つてるけど、カッペー君の事を良く心配しているよ」

それなら本気で動いても大丈夫ですね。

「傭兵隊の仕事は命懸けですからね。最近ソニアさんはカッペー君の話をしますか？」

「そういえば最近はあるナルシスト騎士の話が多いよ。それがどうしたの？」

「多分キーザンはチャームの魔法を使っています。あっキャロルとチエルシーさんのバングルにはチャーム無効の魔石をつけていますから」

「何それ、信じられない！！だからソニア達は、あのナルシストに好意的なの？」

「この間のサイン会の際にキーザンの指輪を確認しました。恐らく今回のストーカー騒動もキーザンの企てだと思います。そこでキャロルにも協力をして欲しいんですよ」

「むしろ私からお願いしたい位だよ。それで何をすれば良いの？…うん、分かったよ、任せて」

キャロルは私の悪ノリに付き合ってくれる優しい義娘で良かったです。

「チャームですかー？そんなに都合良く効くんですかー？」

「そりゃ見ず知らずの相手には効きませんよ。条件としてはある程度の好意かそれに類似した感情を持っている事です。今回は所謂つり橋効果につけ込んだ形になります。ストーカーに後を付けられて不安な所に颯爽と登場してチャームの効果を倍増させたって感じでしょう。つまりストーカー騒動もキーザンが仕組んだ物だと思えます」

「それが本当ならお花畑騎士団じゃなくークズ騎士団に格下げですよー」

リアは怒りを隠さない様です。

「今、ロックオーガー伯爵が調査をしてくれています。傭兵隊の方達にかかれば騎士の企みなんて子供騙しですから」

ましてや今回は同僚のカツペー君の幸せが関わっていますからね。

「でも何を調べてもらっているんですかー？」

そんな時に研究室のドアが乱暴に開かれました。
こんな開け方をする人は1人しかいません。

「コージ、お前のにらんだ通りだったぜ。俺の旦那からの伝言だ”ロックオーガー家及びに傭兵隊は全面協力をさせてもらう”だそう
だ」

それは有り難いです。

「コージさん、この後はどうするんですかー？このままじゃソニアが、あのクス騎士に惚れちゃいますよー」

「リアさん安心してください。所長ときちんと絵図面を書きました。今回の件を利用して所長は騎士団を大人しくさせるみたいですから」

「分かりましたけど無料で請け負ったんですかー？」

「違いますよ、依頼主はマジックガールズの事務所ですよ。チャームを解いてソニアさんの目を覚まして欲しいとの事です。あつ先輩それとカツペーさんの得意な戦闘スタイルを教えて下さい」

さて、若者達の幸せの為に、おじさんが頑張りますか。

side キャロル

今日は久しぶりのコンサートなんだけど、なんであのナルシストも楽屋にいるのよ。

「皆さんの事は私が美しく、そして華麗に守って差し上げますからファンの皆様に天使の歌声を届けてあげて下さい」

パパ、この人怖いよ。

あんな臭い台詞をウインクしながら言えるんだよ。

でもどん引きしているのは私とチエルシーだけなんだよね。

ソニアに至っては目をキラキラさせてるし。

「ソニアそういえばカツペー君から何か聞いてないない？私とチエ

ルシーが実習で行っている研究室に傭兵隊から依頼がきたんだけど。パパじゃなくイ・コージ所長の話だと、かなりヤバい討伐かもしれないんだってー」

パパが言うにはチャームで元からある感情を消し去るのは不可能らしい。

「し、知らないわよ。あんな馬鹿の事なんて、人の気持ちも知らないで傭兵隊になんて入った奴が危険な目にあうのは自己責任なんだからねっ！」

ソニア、その割には顔が青いんだよねー。

「それなら良いんだけどさ。今日コンサートを見に来るみたいだから、手ぐらい振ってあげても良いんじゃない」

キーザンを見ると明らかに動揺している。

パパいわくマジックアイテムは万能じゃありません。いかに欠点を知って使いこなせるかが大事なんです、でもキーザンはマジックアイテムに頼りきって欠点を把握できてないみたい。

「それじゃストーカーが怖いから私は自分の私物に結界を張っておくね。みんなのにも張ろうか？」

「頼みたいけど、それだとキャロルしか触れないんじゃない？」

「ソニア大丈夫だよ。登録した人は結界を無効にできるから」

「それなら私も登録してもらおうかな。何かあった時に美しいエンジェルの宝物を守る義務があるからね」

なに白い歯を見せて笑ってるのよ。

アンタは自分からパパが仕掛けた罠に飛び込んで来たんだからね。

イ・コージ親娘の暗躍（後書き）

指摘、感想お待ちしております。
ザコの次話も書かなきゃ

イ・コージとコンサート（前書き）

ザコの人気投票をしています、イ・コージも頑張っています。

イ・コージとコンサート

side イ・コージ

マジックガールズのコンサートを見に来たんですけども…

おじさんは、この盛り上がりについていけません。

私がそんなに叫んだら喉が枯れちゃいますよ。

あの奇妙な踊りなんて絶対無理です。

何よりまだ誰もステージにいないのに何で盛り上げられるんでしょうか？

軽快な音楽と共にマジックガールズの皆さんが出て来たんですけども。

（キャ、キャロルのスカートが短か過ぎませんか？パパは、この会場にいる人達の記憶を消去したくなりましたよ。いや私なんかの魔力でキャロルの可愛い姿を記憶から消し去るなんて不可能ですよね）

そしてコンサートを見たから断言ができます。

マジックガールズの中でキャロルが一番歌も踊りも上手なんです！！

「コージさん、そろそろ行きますよー」

「リア、次の歌にキャロルのソロパートがあるんですよ。けれど…けれども時間なんですよね」

コンサートはまだ半ばなんですけども、私は後ろ髪をひかれる思いで会場を後にしました。

「リア、例の物は準備できましたか？」

「ええ、ばつちりーですよー。でもこんな罠に引っかかりますかねー？」

「さっき、キャロルから連絡がきてキーザンは結界認証メンバーに登録して欲しいって言ったそうですよ」

「バレてないって思っているんですかねー？普通ならキャロルやチエルシーにチャームが効かない時点で不思議に思う筈なんですけどー」

「人は自分に都合の良い事だけを信じたいものなんですよ。ましてやキーザンさんはあの容姿で騎士ですからね。私と違って女性に嫌われた経験が少ないでしょうから、キャロルやチエルシーさんの態度は照れ隠しだと思っているんでしょう」

キーザンさんは言われた事がないでしょうね。

見た目が生理的に受け付けないとか、キモいとか、その顔で良く生きてるなとか…。

「もうコージさんはネガティブ過ぎますよー。私やキャロルは嫌っていませんからねー。もちろんキーザンは嫌いですけどー」

「それはありがとうございます。さてザギンさんと合流しますか」

「イ・コージさん…リアちゃん、どうかよろしくお願いします。最近のソニアちゃん達を見ていると心配で心配でーえ。アイドルにとってスキヤンダルは命取りなのに」

「キーザンさんはスキャンダル騒動にしたいでしょうね。そうしたら騒動らソニアさんを庇う名目で自分の屋敷に招待できますから」

自分の屋敷なら叫ばれても、わめかれても平気ですからね。

「でもイ・コージさん、キーザンは剣を持っていますよ。大丈夫ですか？くれぐれも傷害事件なんて起こさないで下さいね」

ザギンさんが心配しているのは私の怪我じゃなく、コンサートの中止でしょうね。

「それなら心配ありません。傭兵隊にガードをお願いしましたから。それでお願いがあるんですけども、彼と一緒にキーザンさんに挨拶に言っても良いですか？。」

side キーザン

後少し、後少しでソニアは私に夢中になるというのに。

カップーと言う男の名前を聞いたソニアは心配でたまらないといった表情になってしまった。

信じがたい、私程に美しく高貴な男が側にいるのに他の男の心配をするなんて。

そんな時、控え室のドアがノックされた。

「失礼します。魔法研究所の者ですが、結界の点検に参りました」

私がドアを開けてやると部屋の外にいたのは、小太りな中年とダサ

い田舎者のガキだ。

「何だね君達は？ここは乙女達の控え室だぞ。君達みたいな醜い男が勝手に入れる場所ではない。一步でも入れば斬り捨ててやるからな！！」

「それは困りましたね。カッペー君仕方ありません、出直しましょう」

カッペー？

「おい、そのダサイ田舎者！！お前は傭兵隊に所属しているのか？」

「そうですよ、良ぐわがったな」

ふん、訛ってみつともない。

そうだ、こいつにストーカーの犯人になってもらえばソニアを独占できるじゃないか。

side イ・コージ

まあ分かりやすいと言うか何というか。

でもキャロルは私の言った事をきちんと守ってくれたみたいです。ね。ちなみに私達は、控え室から少し離れた場所で待機しています。でもカッペー君だけは廊下に残ってもらいました。

「コージ君、誤解しないでくれよ。貴族が全員あんなのじゃねえかな」

私に溜息混じりに話し掛けて来たのはロックオーガ伯爵様。
カッペーさんの所属する傭兵隊の隊長にして、エリーゼ先輩の旦那様です

「ガドイン大丈夫だよ。コージは研究者だ、自分の目で見て耳で聞いて判断するさ。まっ俺の愛しの旦那を、あんな盆暗騎士と一緒にしたら、ぶん殴るだけだな」

先輩、それじゃ私が大丈夫じゃないです。

「大丈夫ですよ。私はアレキサンドラ家のクリスさんとも親しくさせてもらっていますし。さてカッペーさん後はお願いしますよ」

コンサートが終了して会場にアンコールの音が響く中、小太りの男性がカッペーさんに近付いて来る。

（あいつがパンチョ・プンチョ。ナルシー家の下男だ。どうやらキーザンは首にされたくなければ言う事を聞けって脅したらしい）

（しかし後ろ姿なんてコージにソックリだな。ソニアがコージを嫌うのも納得だな）

太っているからって、一括りにしなくても良いじゃないですか。

「つまりパンチョさんがストーカー役をさせられていたんですね。それじゃリアお願いします」

パンチョさんは、カッペーさんに何かを渡すと外に逃げて行きました。

それに続いてリアもカップーさんに接近して何かを渡しました。
さてと、これで準備は整いました。

イ・コージとコンサート（後書き）

作中に出て来たその顔では、作者が某サイトで言われた言葉です。

ソニアの正体？（前書き）

ソニアの正体？

side キャロル

「申し訳ありません。ソニアさんのバッグが盗まれてしまいました。私が皆様の美しい歌声に惹かれて席を外したばかりに。でもご安心下さい、必ずこの私が醜いストーカーを捕まえてみせます」

キーザンがわざとらしく騒ぎ立てている。けど残念、貴男がパパに捕まるんだよね。

「キーザン様、犯人の目星はついてるんですか？」

チャームの効果なのかソニアはキーザンの大根演技に疑問をもっていないみたい。

「ええ先程イ・コージという中年とカツペーという田舎者が訪ねてきました。あいつ等が怪しいかと」

（キャロル、ソニアあんな状態だけど大丈夫なのかな？）

（私のパパに抜かりはないよ。ちゃんとソニアを元に戻すマジックアイテムはあるから。後は使うタイミングだけ）

「イ・コージ？あのキモい親父？やっぱりあいつがストーカーだったんだ。嫌だ最低！！」

（キャロル…目が全然、笑ってないけど大丈夫？）

（チェルシー私は全然怒ってないよ？パパはソニアの為に徹夜したのにキモいなんて言うのはチャームの所為だから仕方ないんだよ…
…ねえー）

決めた！この怒りはキーザンにぶつけよう。

「私はあのカッペーとかいう田舎者の仕業だと思いますよ。きっとそうです」

「カ、カッペーは子供の頃から剣術を頑張っていたから小太りなんかじゃないですっ」

パパいわくチャームは女性の香水みたいな物なんだって。

あくまで自分の魅力を魔法で底上げするだけで元からある感情を消し去るなんて事は難しいらしい。

「私の心配をしてくれるとはソニアはなんと優しいんでしょうか。私の華麗で美しい剣術があれば田舎剣術なんて相手になりません」

今の言葉をどう解釈したらそうなるんだろう？

きっとキーザンには強力な自己愛チャームが掛かっていると思うんだ。

「随分と賑やかですね。マジックガールズの皆様が戻って来たのなら結界の点検をして良いですか？」

そんな中、パパとカッペー君がシレッとした顔で登場してきた。

「ふん、お前の間抜けな結界の所為でソニアのバッグが盗まれたんだ。いや自分で作った結界なら出入りは自由な筈…犯人はお前達だ」

っ！！」

キーザンはビシッと音がしそうなぐらいにパパ達に向かって指をさした。

馬鹿だ、筋金入りの馬鹿がいるよ。

「いきなり犯人扱いですか。証拠はあるんですか？」

かたやパパは冷静そのもの、大人の余裕ってやつ。

「証拠？お前達が犯人ならソニアのバッグを持っている筈。そうカツペーが持っているバックはソニアのバックに間違いないっ！」

いや、パパ達が犯人なら、こんなに堂々とバックを持っていないでしょ。

「このバックがソニアさんのバックだって証拠はありますか？同じ型のバックなんていくらでもありますよ？」

「ふっ、語るに落ちたな。ソニアのバックにはハンカチと口紅が入っているんだ。そのバッグの中にもきつとあるさ」

うわっ、最悪、あいつソニアのバッグの中身を見たんだ。

「仕方ないですね。カツペーさんバッグを開けてみて下さい」

カツペー君がバックを開けてひっくり返すも中身は空っぽ。

「何も入っていませんよ。それにね、私達がこのバッグを手に入れるのは不可能なんですよ」

パパは私達の間をすり抜けると控え室のドアを開けて控え室の入り口を叩いた。

「聞こえますか？私が叩くのにあわせてカンカンッって音がするのを。私はキャロル：さんをお願いしたのは罨としてわざとソニアさんのバッグに結界を張らない事そして控え室全体に結界を張り巡らせる事です。だからあの時私とカッペーさんは控え室に入らなかつたんじゃない、入れなかつたんですよ」

パパの存在はみんなにも内緒だから仕方ないけども、パパにさん付けされるのは凄く嫌。

「コージ君、パンチヨも全てはいたよ。ちょっとだけ、ほんのかなりだけどエリーゼが張り切りすぎてパンチヨは気絶しているけどね」

確かあの人は傭兵隊の隊長様、つまりエリーゼ主任の旦那様。

そして何時もエリーゼ主任のしごき？に耐えてるパパは何気に丈夫なんだよね。

「ちなみにーソニアのバッグは私が持っていますよー。パンチヨさんが無理矢理カッペーさんに押しつけたのをー私が預かっていたんですよー。でもキーザンさんは何でバッグの中身を知っていたんでしょうねー」

続いて嫌味たつぷりに登場したのはリアさん。

「う、うるさい。この下民共が！！僕のお父様は子爵なんだぞっ」

うわっ、なんてお約束なキレかたをしちゃうの。
そんな事よりもパパがアイコンタクトをしてきた。

私はバングルにハマっているアンチ・チャームの魔石に魔法を流し込む。

廊下を浄化の白いを光が包み込む。

「今の光はアンチ・チャームの光です。ここでネタばらしはしないであげますから、後はロックオーガ伯爵様が貴族審問会に連行してください」

ロックオーガ様は伯爵家当主、キーザン・ナルシーは子爵家の次男、どちらが身分が上かは明瞭だ。

「僕に命令するなっ！！斬り捨ててやるっ」

キレたキーザンがパパとカップー君に斬りかかる。

「オラに任せるだす…」

カップー君がツツと静かに前へとでる。

落ち着き払ったその姿はドタドタと走るキーザンとは対照的。

そしてもう1人カップー君と対照的なのがソニア、真っ白な肌が誰を心配してか真っ青だ。

カップー君とキーザンがぶつかる寸前、カップー君は静かに腰を落として刀を煌めかせる。

キーザンはドシャリツと崩れ落ちる音まで賑やかだった。

「心配ないだす。峰打ちだすよ…」

静かに呟くカップー君。

「なに格好つけてんだ、おめえ。オラがどんだけスパイしたがわ

がつてらんだが？（なに格好つけてんのよ。私がどれだけ心配したか分かってるの？）」

（キャ、キャロル。ソニアさんどうしちゃったんですか？）

（ソニアは興奮するとお国訛りがでちゃうんだよ）

「なに言ってるだす。オラがあつたらだヘツポコ騎士さ負けるワゲねえべ（何言いやがる。俺があんなヘツポコ騎士に負ける訳ないだろ）」

「オラがせっかくスパイすてやってるのに、めぐぐねえじゃ（私が心配してあげてるのに、可愛くないわねっ）」

（えーと、ソニアさんがカップー君を遠ざけた理由って）

（ソニアはプライドの高い流行の最先端をいく猫人族ってのが売りだから、あの訛はだしたくないみたいんだ）

「しゃしねっ、オラは隊長さ鍛えでもらって、わやつえくなっただ（うるさいっ、俺は隊長に鍛えてもらって、凄く強くなっただぜ）」

「あーわがったじゃ。もう頼まれてもスパイしてやらねはんでな（わかったわよ。もう頼まれても心配してあげないんだからねっ）」

ツンデレ訛り猫人族じゃマニアック過ぎるもんね。

色々と片づいたある日、ロクオーガ伯爵が研究室に訪ねてきました。

「闘技場の建設ですか？」

「ああ、最初から作るんじゃないか仕掛けを作って欲しいんだ。サン・エルフの奴等注文が多くてよ」

この時まだ意外な再会に繋がるとは予想もしついでませんでした。

ソニアの正体？（後書き）

ザコとリンク予定&ザコの人気投票開催中です
イ・コージ以外にも票は入るのか？

マジックガールズのエルフ（前書き）

自分のやっているSNSでザコやイ・コージを知っている人がいる
か聞いてみたいです

マジックガールズのエルフ

side イ・コージ

ロックオーガ伯爵から預かった依頼書を確認しているんですが、正直言つと拒否をしたいです。

だって南エルフからの依頼は、あからさまに自分達を有利にしようとしてるんですよ。

こんなの私が確実に、北エルフの皆様に恨まれちゃいますよ。

「パパ、渋い顔をしてどうしたの？」

頭を抱えている私に話掛けてきてくれたのは、義娘のキャロルでした。

「キャロル……。そう言えばマジックガールズにエルフ族の方がいましたよね」

「うん、フローラは凄い美人だよ。パパも、この間のコンサートの時に見たでしょ？」

あの時パパはキャロルしか見てませんでした。

「見たと言えば見ましたし、見てないと言えば見てないんですよ。それでフローラさんは北エルフですか？南エルフなんですか？」

キャロル、パパぐらいの年になると若い娘はみんな同じに見えちゃうんですよ。

「もうパパちゃんと見てなかったでしょ？フローラは色白な北エルフだよ」

まずいです、パパはキャロルの仲間に恨まれたくないです。

「そうですか。一度フローラさんと話が出来ませんか？ちょっと確認をしておきたい事があるんですよ」

数日後、キャロルがエルフの少女を連れて来てくれました。

「パパ、フローラを連れて来たよ」

フローラさんの特徴は色白さと長い金髪でした。

「お初にお目に掛かります。フローラ・ブルローズでございます。イ・コージ様のお話はキャロルさんから良く伺っておりますわ」

フローラさんはロングスカートの端を軽く摘んで頭を下げてきました。

「話ですか？口うるさいとか甘いとかでしょうね。ところでフローラさんガーグ・エルフィンローズ王子とは、どのような方なんでしょうか？」

ガーグ・エルフィンローズ王子は北エルフの代表にして、エルフィンの王位継承者なんです。誰か詳しい人物を知らないんです。私はガーグって名前に縁があるんですかね、私を捕らえた冒険者の名前もガーグでしたし。

「ガ、ガーグ様が王位継承者として認められたのですか？それはなんて嬉しい知らせなんでございましょう。ああ精霊様感謝致します」

フローラさんは感激のあまりに涙を流しました。

「ガーグさんは、そんなにも優れた人物なんですか？」

それならもう少し有名だと思っんですけども。

「お口を謹んで下さい。ガーグ様はシャルレイン王女の直系にあたられる尊き血筋のお方です。さん付けなんて不敬な口の聞き方は精霊様がお許しになっても、不肖フローラ・ブルーローズが許しませんわっ！！」

今度フローラさんは、烈火の如く怒って来ました。

「お気に触ったのなら謝ります。しかし私は血筋で人を判断しません。今回私が受けた依頼は著しく北側に不利な為にガーグ王子様のお人柄を知りたかったんですけどね」

「フローラ、真面目なパパが情報漏洩なんて奇跡に近いんだからねっ。パパはルーンランド以外に居場所がないのにフローラに話をしてくれているんだよ」

キャロル、やっぱり持つべきは優しい義娘ですね。

「申し訳ありません。つい興奮してしまいましたわ。ガーグ様は強くて勇壮、正義感や不屈の闘志を持たれている方ですわ。もちろんお優しく民にも分け隔てなく接してくれます」

勇壮で不屈の闘志を持つエルフさんですか？
いまいち想像がつかないんですけども。

「フローラさんはガーグ王子の側近に誰か親しい方はおられますか？」

「ええ、我がブルーローズ家は貴族の家柄ですございますから。それならミッシェル様やセシリーが適任ですわね」

「ミッシェルさんもセシリーさんも随行員として名前が挙がってましたね」

不思議な事に、随行員の欄にその他の表記がありましたけど

「ミ、ミ、ミッシェル様がルーンランドに来られるのですか。ああ、離れていても赤い糸で繋がれた者同士は巡り会う運命にあるのですね」

どうやらフローラさんは遠い世界に旅だったらしく、中々戻ってきません。

「キャロル、フローラさんって、こんなに濃い方だったんですか？」

「普段は冷静なんだけどね。愛国心が強いっていうか、エルフィンの事になると人が変わっちゃうと言っか」

「ああ、ミッシェル様口では何だか言っても2人の気持ちは一緒だったのですね。2人はガーグ様を支えてエルフィンをより一層素晴らしき国に導く選ばれたエルフなんですわっ」

… パパは、 キャロルがマジックガールズにいるのが心配になってきました。

マジックガールズのエルフ（後書き）

人気投票最終日、結果は後日に

まあ一位は断トツであの方なんですけど

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5132y/>

魔法研究所 中年所員イ・コージの日々 ザコ 勇者 番外編

2012年1月13日14時27分発行